

松江城三之丸跡
松江城下町遺跡（殿町 128）
—島根県庁改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年3月
島根県教育委員会

松江城三之丸跡
松江城下町遺跡（殿町 128）
—島根県庁改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年3月
島根県教育委員会

序

松江城三之丸は、城山南側の平地に内堀によって囲まれた区域で、現在島根県庁の本庁舎敷地として利用され、現存天守を仰ぎ見ることができる景勝地ともなっています。

江戸時代の三之丸は、御殿が建ち並び、藩主の政務と日常生活の場として使われてたことが、古写真や絵図などから窺えます。そして明治維新後の明治8(1875)年にこれらは取り壊され、明治42(1909)年以降は県庁舎敷地となっていることは広く知られるところであります。

その後、県庁舎は二度の焼失を経つつも、昭和34(1959)年に地上6階、地下2階の現庁舎が建設されて50余年が経過し、歴史的な建造物となりつつあります。

こうした中、島根県においては平成24年度から庁舎の耐震工事が実施されることとなり、県教育委員会は、事前に三之丸やその周辺部において、地下に残る江戸時代の遺構確認のための発掘調査を行うこととなりました。

調査の結果、県庁建設工事の影響を免れた江戸時代の遺構が、想像以上に良好に確認され、これまで存在が明らかでなかった御殿前庭の「御池」が発見されるなど、貴重な成果を得ることができました。

本書は、平成24～26年度に実施した松江城三之丸地区等の発掘調査成果を取りまとめたものですが、ここに記載された知見は、これまで不明であった三之丸の実態の一部を初めて明らかにするものとなります。

最後になりましたが、本調査への御指導・御協力をいただいた関係各位に対して、厚くお礼申し上げます。また、本書が松江城に対する関心を高めるための一助となれば、幸いに存じます。

平成27（2015）年3月

島根県教育委員会教育長 藤原孝行

例言

1. 本書は島根県教育委員会が島根県総務部営繕課の依頼を受けて、平成 24 年～ 26 年度に実施した島根県庁改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 本報告書の発掘調査対象遺跡、及び事業年度は以下のとおりである。

平成 24 年度 松江城三之丸跡（1 区：松江市殿町 1）

平成 25 年度 松江城三之丸跡（2 ～ 4 区：松江市殿町 1）

松江城下町遺跡（殿町 128）（松江市殿町 128）

平成 26 年度 松江城三之丸跡（工事立会：松江市殿町 1）

松江城下町遺跡（工事立会：県警本部裏）

整理等作業・報告書作成

3. 調査組織

調査主体 島根県教育委員会

平成 24 年度事務局 祖田浩志（文化財課長）

廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、三島伸（同 総務 G 課長）

調査担当者 植真治（文化財課調整監）、今岡一三（同 企画幹）、東山信治（同 文化財保護主任）

勝部智明（埋蔵文化財調査センター企画員）是田敦（同 企画員）、武田尚志（同 兼文化財保護主任）、渡辺聰（同 調査補助員）、福田市子（同 調査補助員）、坂根健悦（同 調査補助員）、飯塚由起（同 調査補助員）、福田沙織（同 調査補助員）

平成 25 年度事務局 野口弘（文化財課長）

廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（同 総務課長）、熱田貴保（同 管理課長）

調査担当者 植真治（文化財課調整監）、角田徳幸（同 企画幹）、東山信治（同 文化財保護主任）

池淵俊一（埋蔵文化財調査センター調査第三課長）、井谷朋子（同 調査補助員）、田中玲子（同 調査補助員）、福田沙織（同 調査補助員）、人見麻生（同 調査補助員）

平成 26 年度事務局 野口弘（文化財課長）

廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（同 総務課長）

調査担当者 植真治（文化財課調整監）、角田徳幸（同 企画幹）、深田浩（同 主幹）

池淵俊一（埋蔵文化財調査センター管理課長）、糸川沙織（同 調査補助員）

4. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（順不同・敬称略）

大橋泰夫・勝部昭・和田嘉宥（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、乗岡実（岡山市教育委員会文化財課長）、松尾信裕（大阪城天守閣館長）、中村唯史（三瓶自然館企画グループリーダー）、花谷浩（出雲市文化環境部文化財課学芸調整官）

5. 発掘調査に際して、以下の方々、関係機関から御協力、御助言をいただいた。（順不同・敬称略）

赤澤秀則、稲田信、川上昭一、徳永隆、渡辺正巳、松江市教育委員会、松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課、松江歴史館、財団法人松江市教育文化振興事業団、出雲市文化環境部文化財課

6. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系X軸方向を示し、座標系XY座標は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
7. 本書で使用した第1・38・41図は松江市都市計画平面図を使用して作成したものである。
8. 本調査に伴って下記の研究者に自然科学的分析をしていただいた。その成果は第6章に掲載した。
花粉分析：渡辺正巳
9. 本書に掲載した写真は、3の調査担当者が撮影した。
10. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、各調査員・調査補助員が行った。遺物・遺構実測図の浄書は整理作業員が行った。
11. 本書の執筆は、担当職員が協議分担して行い、文責は文末に記した。
12. 本書の編集は、池淵・糸川がおこなった。
13. 本書の編集にあたってはDTP方式を採用し、Adobe社のIllustrator CS6、Photoshop CS6を用いてトレース・画像処理等を行い、InDesign CS6で編集をおこなった。
14. 註は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置した。参考文献は各章末にまとめて示した。本文編の写真、挿図、及び表の番号は第6章を除いて全体の通し番号により表示し、第6章については独立して番号を振っている。
15. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）にて保管している。

目次

第1章	調査に至る経緯と調査経過	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査経過	1
第2章	位置と歴史的環境	3
	第1節 遺跡の位置	3
	第2節 歴史的環境	4
第3章	調査の概要	6
	第1節 基本層序	6
	第2節 調査の概要	7
第4章	松江城三之丸跡の調査	8
	第1節 第1次調査(1区)	8
	第2節 第2次調査(2区)	15
	第3節 第3次調査(3区)	26
	第4節 第4次調査(4区)	33
	第5節 工事立会調査	36
第5章	松江城下町遺跡(殿町128)の調査	38
	第1節 調査の経過	38
	第2節 調査の結果	38
第6章	松江城三之丸発掘調査に伴う花粉分析	43
第7章	総括	51

挿図目次

第1図 調査区配置図	2
第2図 松江城三之丸跡・松江城下町遺跡の位置	3
第3図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図	4
第4図 松江城三之丸跡 基本層序	6
第5図 1区上層遺構配置図	9
第6図 1区上層遺構実測図	10
第7図 1区下層石積み遺構実測図	11
第8図 1区下層石積み遺構実測図2	12
第9図 1区出土遺物実測図	13
第10図 1区出土遺物実測図	14
第11図 2区トレント配置図	16
第12図 2区北側遺構実測図	17
第13図 2区北側土層実測図	18
第14図 2区SB01付近出土遺物実測図	19
第15図 2区SB01遺構実測図	19
第16図 2区SD01実測図	21
第17図 2区SD01出土遺物実測図	22
第18図 2区中央土層実測図	23
第19図 2区SD02実測図	23
第20図 2区SD03出土遺物実測図	24
第21図 2区遺構に伴わない遺物実測図	24
第22図 2区南側上層・下層実測図	25
第23図 3区第1面実測図	27
第24図 3区第2面実測図	28
第25図 3区第3面実測図	29
第26図 3区第4面実測図	30
第27図 3区堀尾期大溝(SD01)実測図	31
第28図 3区第5面実測図	32
第29図 4区トレント配置図	33
第30図 4区試掘トレント実測図	34
第31図 4区工事立会トレント実測図	35
第32図 県庁本庁舎裏 T1・T2実測図	36
第33図 県警本部裏トレント土層図	37
第34図 松江城下町遺跡 第1層実測図	39
第35図 松江城下町遺跡 第2・3面実測図	40
第36図 松江城下町遺跡 出土遺物実測図	41
第37図 松江城下町遺跡 第4面実測図	42
第38図 松江城三之丸跡 遺構配置図	52

第39図 絵図からみた松江城三之丸の変遷(1).....	53
第40図 絵図からみた松江城三之丸の変遷(2).....	54
第41図 松江城下町遺跡(殿町128)周辺地形図及び城下町絵図	55

表目次

第1表 松江城三之丸跡出土遺物観察表.....	58
第2表 土錐観察表.....	59
第3表 木製品観察表.....	59
第4表 瓦分類別重量表	59
第5表 松江城下町遺跡出土遺物観察表	59

写真図版目次

図版 1	1区 全景(南東から)	2区 SDO2 検出状況(東から)
	1区 上層遺構(西から)	2区 SDO2(東から)
	1区 西壁土層断面	2区 SDO2(北東から)
図版 2	1区 SDO1	2区 SDO2 瓦出土状(東から)
	1区 SO1	2区 SS06a-a 土層(南西から)
	1区 SK01	2区 SS06+SDO3b-b' 土層 (南から)
図版 3	1区 石積み遺構(南東から)	2区 SS06(南西から)
	1区 石積み遺構(東から)	2区 SK02 検出状況(北から)
図版 4	1区 石積み遺構(北東から)	2区 SK02 完掘状況(北から)
	1区 石積み遺構北壁	2区 SDO3 検出状況 (西北から)
図版 5	1区 石積み遺構北西隅	2区 SDO3(南から)
	1区 石積み遺構西壁	2区 SDO3 陶磁器出土状況 (南から)
図版 6	1区 石積み遺構階段(真上から)	2区 SDO3 付近下層確認 状況(南西から)
	1区 石積み遺構階段(南東から)	3区 1層上面検出時(南から)
	1区 石積み遺構 脇木・杭	3区 1層上面検出時 (北西から)
図版 7	1区 石積み遺構 脇木・杭	3区 調査風景(南から)
	1区 石積み遺構内側 碓敷検出	3区 1層上面県庁舎掘り方 埋土除去時(北から)
	1区 石積み遺構北側土層	3区 1層上面県庁舎掘り方 埋土除去時(南から)
図版 8	2区 土層確認グリッド(東から)	3区 1層上面県庁舎掘り方 埋土除去時(東から)
	2区 北半部全景(北から)	3区 西壁セクション(東から)
図版 9	2区 SB01(北東から)	3区 西壁セクション拡大 (東から)
	2区 SB01(北西から)	3区 2層上面検出時 (北から)
図版 10	2区 SB01・SS01 断面(東から)	3区 3層上面検出時 (南から)
	2区 SB01・SS02(東から)	3区 3層上面検出時瓦出土状況
	2区 SB01・SS03(東から)	
図版 11	2区 SDO1(東から)	
	2区 SDO1 土層(西から)	
図版 12	2区 SDO1(北西から)	
	2区 SDO1(北から)	
	2区 SDO1 挖形(東から)	
図版 13	2区 SS05(南東から)	
	2区 SO1(南から)	
	2区 SO2(南から)	
図版 14	2区 SS06(北から)	
	2区 SS06 横 b-b' 土層(西から)	

- 図版 22 3 区 4 層上面検出時
(北から)
- 図版 23 3 区 堀尾期大溝 (北から)
3 区 堀尾期大溝 (西から)
3 区 堀尾期大溝セクション
(東から)
- 図版 24 3 区 堀尾期大溝完掘時 (南から)
3 区 堀尾期大溝完掘時 (北から)
3 区 最終掘下げ面 (東から)
- 図版 25 3 区 最終掘下げ時セクション
(東から)
3 区 最終掘下げ時セクション
拡大 (東から)
3 区 最終面 (北東から)
- 図版 26 4 区 分庁舎北調査区
セクション (北から)
4 区 分庁舎北調査区
セクション (東から)
4 区 分庁舎北調査区
工事立会時 (東から)
- 図版 27 松江城下町遺跡
表土掘削前状況 (北から)
松江城下町遺跡
第 1 面完掘状況 (東から)
松江城下町遺跡
第 1 面ピット群 (南から)
- 図版 28 松江城下町遺跡
調査区西壁セクション
松江城下町遺跡
第 2 面検出状況 (南から)
松江城下町遺跡
第 2 面検出状況拡大 (南から)
- 図版 29 松江城下町遺跡
第 2 面検出状況拡大 (東から)
松江城下町遺跡調査指導風景
松江城下町遺跡
第 3 面検出状況 (南から)
- 図版 30 松江城下町遺跡
第 3 面検出状況拡大 (南から)
松江城下町遺跡
調査区から松江城方面を望む
(東から)
- 図版 31 松江城下町遺跡
SDO1-A セクション (南から)
松江城下町遺跡
SDO1-A セクション拡大
(南から)
松江城下町遺跡
SDO1-A 完掘状況 (西から)
- 図版 32 松江城下町遺跡
SDO1-A 完掘状況 (北から)
松江城下町遺跡 SDO1
肩付近杭列断割り状況 (東から)
松江城下町遺跡 SDO1
肩付近杭列断割り状況拡大
(東から)
- 図版 33 松江城下町遺跡
第 4 面検出状況 (南から)
- 図版 33 松江城下町遺跡第 4 面
検出状況西側 (東から)
松江城下町遺跡第 4 面検出時
西壁セクション (東から)
- 図版 34 松江城下町遺跡 SDO1-B 完掘状況
(南から)
松江城下町遺跡 SDO1-B 完掘状況拡大
(南から)
松江城下町遺跡 SDO1-B
底部付近セクション (南から)
- 図版 35 1 区 出土遺物
- 図版 36 1 区 出土遺物
- 図版 37 1 区 出土遺物
- 図版 38 1 区 出土遺物
- 図版 39 2 区 SBO1 付近 出土遺物
2 区 SDO1 出土遺物
- 図版 40 2 区 SDO1 出土遺物
- 図版 41 2 区 SDO3 他 出土遺物
2 区 遺構に伴わない遺物
- 図版 42 3 区 出土遺物
4 区 出土遺物
松江城下町遺跡 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

松江城三之丸跡は、現在島根県庁本庁舎とその敷地として利用されているが、近世城郭松江城の一部として、歴史的な重要性は以前から周知されてきたところである。一方で県庁という公的な機関として、防災機能の強化や施設の安全性も図られるべき課題であり、島根県総務部管財課・營繕課による計画のもとで改修がなされている。今回の調査は、県庁舎の耐震補強工事や非常用発電機の地下オイルタンクの設置工事等に端を発するものであり、三之丸地区において初めて本格的に実施された発掘調査である。

平成24年11月に、島根県総務部營繕課より県庁本庁舎の耐震工事に伴う地下オイルタンクの移転新設について協議があり（12月3日付け保護法第94条通知）、周知の埋蔵文化財包蔵地における地下工事であり、島根県教育委員会は発掘調査の実施を勧告した。ただし、現地がアスファルト舗装されていることから工事に並行して試掘調査を行うこととなった。なお、この段階では、漠然とではあるが、本庁舎は一部地下2階の巨大な建造物であり、地下遺構の大半は失われていると認識していた。

第2節 調査経過

1. 松江城三之丸跡第1次調査

平成25年2月5日にオイルタンク設置予定箇所（1区）について、アスファルト除去後に、重機を併用して試掘調査を行ったところ、北半は本庁舎地下2階部分建設に伴い大きく掘削されていることが判明したが、南半では地下約0.6mの深さで、近代の來待石製暗渠が検出されたため、江戸時代の遺構の存在を確認するため引き続き発掘調査することとなった。

2月7、8日、近代遺構を記録保存した後、下層確認のためさらに1m以上掘り下げたが、江戸時代の遺構面は検出できなかったため、配管の迂回工事や矢板の打設後に工事立会をすることとした。

3月7日、重機により下層掘削を再開したところ、階段を伴う精巧かつ大規模な石積み遺構が検出された。三之丸跡では初めて確認された重要遺構であるため管財課・營繕課と取扱協議を行い、現状保存することとなった。発掘調査は文化財課で対応したが、遺構実測は埋蔵文化財調査センターの支援を受けて対応した。3月20日には一般公開を実施し、4月8日に遺構を真砂土で保護したうえで、調査区を埋め戻した。

2. 松江城三之丸跡第2次調査

オイルタンク設置予定場所が1区の北側約20mの地点（2区）に変更となったため、5月8日から発掘調査を再開した。調査区は重要遺構が検出された場合に変更ができるよう広めの範囲を対象とした。翌日には調査区の北側で比較的良好に残存している建物跡や溝跡が検出され、埋文センターの応援を受けて対応した。5月22日、26日の調査指導会等により、残存状況の良い部分は現状保存を図るべきと判断し、再び工事計画の変更協議を行うことになった。2回目の設計変更協議であることや、工事期間が遅延している等の状況下ではあったが、変更協議の結果遺構への影響がほとんど無いコンクリート製の旧便槽跡地に移動する設計変更となった。5月26日には2回目の一般公開を実施した。

3. 松江城三之丸跡第3次調査

本庁舎の耐震施設建設工事は、地下数mまで掘削する大規模な工事であったが、7月22日に試掘調査を実施した結果、対象地は県庁地盤建設時の掘削で江戸時代の遺構はほとんど失われていたことが確認された。掘削を免れたわずか数m四方の部分を3区として本発掘調査を実施した。調査は、9月17日～18日まで埋蔵文化財調査センターが実施し、江戸時代の造成土や築城以前の溝・河道路を検出した。

4. その他の調査経過

県管財課・営繕課との協議により、小規模ながら分庁舎や東庁舎、県警本部などでもオイルタンク等の設置工事が予定されていることが判明し、以下のとおり、発掘調査や試掘調査を実施した。

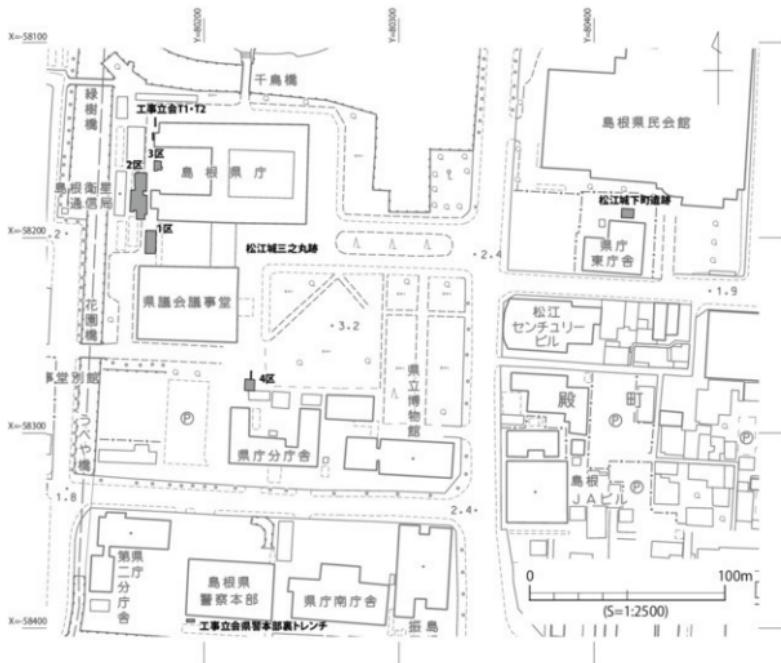
松江城三之丸跡第4次調査 分庁舎の地下オイルタンク設置工事に先立ち事前協議した結果、設置箇所を遺構に影響の無い三之丸内堀内に変更することとなった。平成26年1月10日に試掘調査、同年2月20日に本調査を実施、三之丸の内堀底面を確認した。

松江城下町遺跡（殿町128） 東庁舎の地下オイルタンク設置工事に先立ち、平成26年2月14日に試掘調査、2月17～19日に本発掘調査を実施後、近世の屋敷境溝などを確認した。

松江城三之丸跡（工事立会） 平成26年5月2日に本庁舎配管工事に伴い工事立会した。

松江城下町遺跡（県警本部裏） 平成26年10月26日～27日に警察本部配管工事に伴い工事立会した。

(椿真治)



第1図 調査区配置図

第2章 位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

松江城及び松江城下町遺跡は、島根県東部の松江平野中央に位置する。松江平野の北側には島根半島の山地、南には中国山地に向かう高地が存在し、西には宍道湖、東には中海が広がる。

松江平野は、原始時代、外海とつながっていた宍道湖が形成した砂州及び中国山地・島根半島から流れる河川の堆積作用によって形成された沖積平野で、宍道湖周辺は標高が低い低湿地であった。

松江城は、標高約28mの亀田山（城山）に本丸・二之丸が築かれており、本丸には天守閣が、二之丸には堀尾期から松平家二代まで藩主の住居があった。三之丸は城山の南側で内堀の対岸の平地（現在の標高は約3m）に築かれている。松平家三代綱近以後は、城主が日常生活や政務を執り行う場所として使用された。

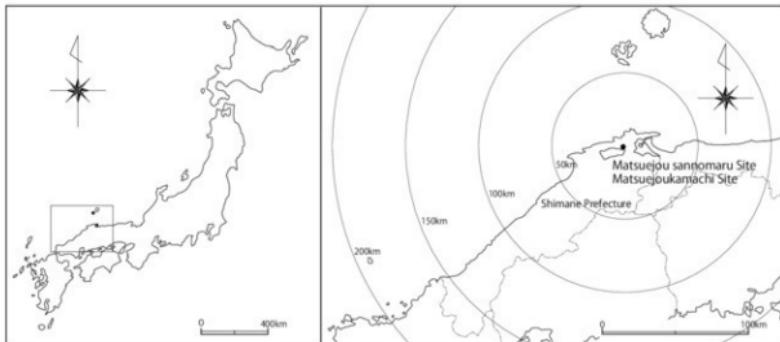
松江城下町は平地に位置し、城を取り巻くように武家屋敷が配置され、その外側には町人地や寺社地が展開している。武家屋敷については、城郭に近い位置に重臣・上級家臣屋敷が配置され、周辺部に行くほど中級・下級家臣の屋敷地となっている。

松江平野に影響を及ぼす大きな変化として、出雲平野を西流して外海に注いでいた「斐伊川」が、江戸時代の寛永年間（1624～1643）に東へ流れを変え、宍道湖に注ぎ込むようになったことが挙げられる。当然、宍道湖の水位は上昇したと考えられ、低地に位置する松江城三之丸や城下町にとってその影響は軽微ではなかったと推測される。松江平野は、大雨や河川の氾濫等に起因する洪水に幾度もみまわれていることが文献から窺える。松江城三之丸跡では、江戸時代に築城されて以来約1.5m嵩上げされたことが明らかになっており、こうした造成によって水害に対処していたものと推測される。

第2節 歴史的環境

松江平野中央部には、周知されている原始・古代の遺跡は少なく、沼や浅い湖が広がっていたものと推測される。

中世になると宍道湖沿いの砂州上に「末次」・「白潟」といった「郷」があったとされる⁽¹⁾。

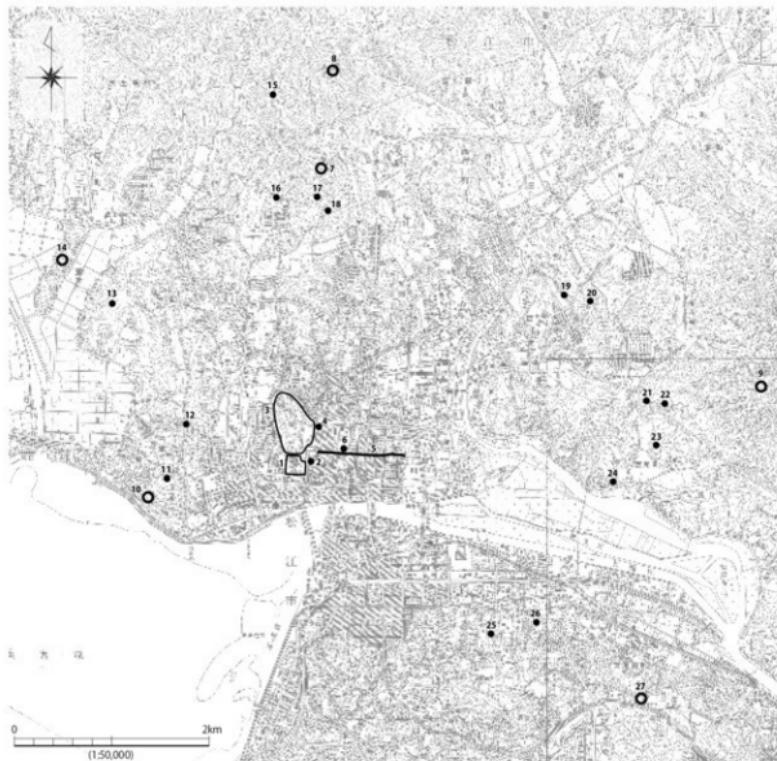


第2図 松江城三之丸跡・松江城下町遺跡の位置

「末次」は、戦国時代には末次氏が治めており、永禄13年（1570）の尼子復興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、毛利時代には末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから、末次莊内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる⁽²⁾。

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』（明の嘉靖41年：1562年）の中に出雲地方の港湾のひとつとして「失喇哈打（白潟）」と記載されており、日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられる。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師などの司に任じていることから、この地に商人・職人の集団が存在し、町場が形成されていたことがうかがえる⁽³⁾。

戦国時代には松江平野周辺は雲芸攻防戦・尼子復興戦の舞台となり、白鹿城（7）、真山城（8）、和久羅山城（9）、荒隈城（10・11）などが攻略・防衛の拠点として築かれている。



第3図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図

慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの武功により堀尾忠氏は出雲・隠岐両国を与えられ、父吉晴とともに月山富田城に入った。しかし、わずか3年後の慶長8（1603）年、忠氏は月山富田城を領国支配の拠点にはふさわしくないと考えて、新たな城地の候補地として松江周辺に選定し、幕府から城地移転の許可を得た。その後、忠氏が早世するが、父吉晴がその遺志を受け継いで亀田山に松江城を築き、城下町を建設した⁽⁴⁾。

城下町の形成にあたり、まず、城下の東側・南側に広がる軟弱な砂州や湿地を埋め立てて、地盤を強固に造成する必要があった。造成土には、築城や堀を掘った際に排出した土を使い、地盤を固めて家臣の屋敷地とした⁽⁵⁾。町の構造は、城郭の周囲に上級・中級の家臣団の屋敷地を配置している。そして、その外側に町人地を配置し、それらを取り囲むように寺社や下級の家臣団の屋敷地を配置している。また、城下の要所には鉤型路、袋小路、勢溜等の防衛施設を配置して城の守りを固めている。

堀尾氏は33年間、出雲・隠岐国を統治し、松江城下町建設の基礎を築いたが、忠氏の子、忠晴に嗣子なく二代で断絶となった。

寛永11（1634）年に若狭国小浜から出雲に入国した京極忠高が松江藩主となるが、寛永14（1637）年に逝去し、一代限りで断絶となる。京極氏の治政はわずか3年余りであったが、その間に治水工事や殖産興業を行なうなど、その治績は大きかった。

寛永15（1638）年、信濃国松本から入国した松平直政が松江藩主となり、明治維新を迎えるまでの233年間、松平氏十代にわたり藩政が続いた。

松江藩は、明治4（1871）年の廢藩置県で松江県を経て島根県となる。初代の島根県庁舎は明治7（1874）年に松江城三之丸の南側にあった松平直応邸を改造して、建築された。三之丸御殿は明治8年（1875）に取り壊され、明治42（1909）年に三之丸跡地に三代目の島根県庁舎が建設された。その後2度の火災で建て替えが行われ、現県庁舎は昭和34（1959）年1月に竣工した。

城下町は、それまでの武家地は公共施設として利用されたり、細かく分筆されたりして、屋敷地は変更されたが、現在でも通りや路地、外堀、内堀、鉤型路等が残っており、江戸時代の町の面影を見て取ることができる。

（東山信治）

註

- (1) 松尾寿 2008『松江ふるさと文庫5 城下町松江の誕生と町のしくみ—近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン—』松江市教育委員会
- (2) 山根正明 2009『松江ふるさと文庫6 城下町誕生前の末次・白潟』松江市教育委員会
- (3) 関宏三 2008「中世のブレ松江」『松江藩の時代』山陰中央新報社
- (4) 松江城創建に関わる2枚の祈祷札により、慶長16（1611）年正月には松江城が完成し、ここで祈祷が行われたことが明らかである。
- 松江市教育委員会 2013「再発見の祈祷札—松江城天守創建に関わる祈祷札について—」『松江城研究2』
- (5) 城下町の造成過程については、松江城下町道路の発掘調査によって明らかにされている。

第3章 調査の概要

第1節 基本層序

三之丸の基本層序は、第2次調査の際に設けた土層確認グリッドで確認できる（第4図）。三之丸造成前の旧表土は、黒色粘質土（16層）で、上面の標高は0.8mである。16層は20cmほどの厚さで、その下層には青灰色粘土（17層）がある。旧表土である16層に当たる土層は、第3次調査でも確認されており、黒色粘土（5層）がそれである（第28図）。5層上面の標高は、1.4mと第2次調査の16層より高く、旧地形は北の城山側に向かって高くなっていたことが分かる。

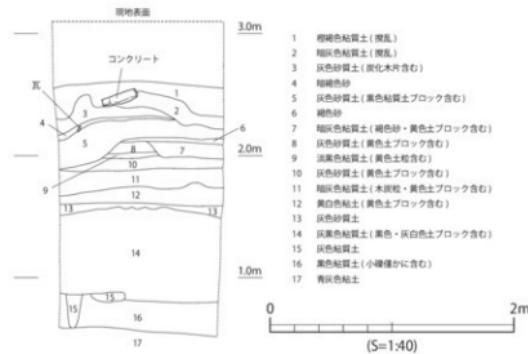
旧表土の上には、三之丸を造成した際の盛土である灰黒色粘質土（14層）がある。14層上面の標高は1.5～1.6m、層厚は70～80cmと厚い。第3次調査では旧表土に掘り込まれた溝を埋める黒灰色粘質土（4層）に当たると見られるが（第28図）、旧地形が高いためか溝の北側では認められない。14層は、三之丸造成時の盛土であり、上面は松江城東側に隣接する松江城下町遺跡殿町279番地（南屋敷）の第4遺構面⁽¹⁾に対応すると見られることから、堀尾期のものと考えられる。14層の上には薄い灰色砂質土（13層）を挟んで、黄白色粘土（12層）がある。12層は、丘陵を掘り崩して持ち込まれた土山であり、整地土であることが明らかである。松江城下町遺跡殿町279番地（南屋敷）では、第4遺構面の上に黄褐色をした山上が盛土されしており、その上面である第3遺構面で出土した木簡から、京極期のものと考えられている。12層上面がこれに対応するものであるとすれば、同様に京極期に当たる可能性が考えられる。

12層より上には、下から順に暗灰色粘質土（11層）・灰色砂質土（10層）・淡黒色粘質土（9層）・灰色砂質土（8層）・褐色砂（6層）が5～20cm程度の単位で盛土されながら嵩上げ、整地されていった状況が窺える。各遺構面の時期は明確にできないが、松平期に相当するものと見られる。

（角田徳幸）

註

- (1) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』2011年



第4図 松江城三之丸遺跡 基本層序

第2節 調査の概要

松江城三之丸跡は、史跡松江城のある城山南側の平地に位置し、内堀によって城山と相対している。松平家三代綱近以後、城主が日常生活や政務を執り行う場所であり、御殿が建ち並んでいた。明治8（1875）年に御殿は取り壊され、明治42（1909）年に島根県庁がこの地に建設される。その後2度の建て替えを経て、現在の県庁舎が昭和34（1959）年1月に完成した。また、周辺で県警本部や南庁舎、東庁舎なども整備されている。

こうした中、島根県庁の改修工事が行われることとなり、これに伴い平成24～25年度に松江城三之丸跡で4次にわたり、松江城下町遺跡で1回の発掘調査を実施した。

松江城三之丸跡の第1次調査は、県庁本庁舎の耐震補強に伴う地下オイルタンクの移設工事に先立って行われたもので、南北10.6m、東西5.6mの範囲を発掘調査した。調査期間は平成25年2月5日～4月6日で、調査面積は59.36m²である。調査区北端から約1／3程度は県庁建設に伴って掘削されていたが、それよりも南側では遺構面が残存しており、上層は近代の石組み暗渠排水遺構、石組み土坑、地覆遺構が検出された。下層で江戸時代の大型の石積み遺構が検出され、埋土の堆積状況や絵図面との比較から池跡であったと推測される。なお、この石積み遺構については、三之丸内部で初めて発見された遺構で、三之丸の空間構造を考えるうえで重要な資料となることから、島根県総務部管財課・營繕課とも協議のうえで埋戻して、保存されている。

第2次調査は、第1次調査の石積み遺構の発見・保存により、地下オイルタンクの移設先が北側に変更されたことによるもので、調査期間は平成25年5月7日～7月11日で、調査面積は152.68m²である。配管やコンクリート污水槽などで攪乱された部分もあったが、礎石建物跡1棟、溝3条、土坑3基などが確認された。礎石建物跡は三之丸御殿の一部と考えられる。また、土層観察から複数時期にわたり三之丸の造成された状況が明らかになった。管財課・營繕課とも協議のうえ、礎石建物跡や石組み溝などが残る調査区の北半は現状保存のため埋戻し、大きく攪乱された南側へオイルタンクが移設されることとなった。

第3次調査は、県庁本庁舎の耐震施設の基礎工事に伴う発掘調査である。この地点は、現県庁の建設によりすでに遺構が大きく破壊している可能性があるため、25年7月22日に試掘調査を実施し、近世の造成面が確認された18m²を対象に9月17・18日にかけて本発掘調査を実施した。築城期も含めて4度にわたる造成面が確認されたほか、築城期もしくはそれ以前の大溝、その下層にある自然河道も検出された。調査後は記録保存として、耐震補強工事が行われた。

第4次調査は、県分庁舎の非常用発電機の地下タンク設置工事に先立つ調査で、調査地点は内堀内にあたる。平成26年1月10日に試掘調査して、内堀の南側石垣がタンク設置箇所から外れることを確認したうえで、矢板の打設を行い、2月20日に発掘調査し、内堀の堆積状況と堀底面を確認した。調査面積は28.45m²である。調査後は記録保存として、タンク設置工事が行われた。

松江城下町遺跡（殿町128）の発掘調査は、県庁東庁舎の非常用発電機の地下タンク設置工事に伴うもので、平成26年2月14日～19日に実施した。近世の遺構面は4面あり、それぞれで南北方向にのびる大溝や杭列、柵列が検出されており、嵩上げが行われながらも屋敷境が踏襲されていたことがうかがわれる。調査後は記録保存として、タンク設置工事が行われた。

平成26年度には、本庁舎北西側（松江城三之丸跡）と県警本部裏（松江城下町遺跡）で配管工事に伴い立会調査を行っている。

（東山信治）

第4章 松江城三之丸跡の調査

第1節 第1次調査(1区)

県庁本庁舎の耐震補強に伴う地下オイルタンクの設置工事に先立ち、南北 10.6m、東西 5.6 m の範囲を発掘調査した。調査期間は平成 25 年 2 月 5 日から 4 月 6 日で、調査面積は 59.36m²である。

調査区北端から約 1 / 3 程度は県庁建設に伴って掘削されていたが、それよりも南側では遺構面が残存しており、上層で明治期の遺構が、下層で近世の大型の石積み遺構が検出された。

1. 上層の遺構(第5・6図)

現地表面から 0.6m 程度掘削したところで明治期の造成土が認められ、石組みの暗渠排水遺構(SD01)と石組み土坑(SK01)、地覆遺構(S01)を検出した。

SD01 来待石の石材を組み合わせた暗渠排水遺構で、調査区を東西方向に横断している。石材は、板状の蓋石と断面形がコの字形の身からなり、蓋石・身の長さは 70cm、幅は 40cm、身の内法幅は 25cm、内法の深さは 25cm である。調査区壁面(第5図)及びサブトレンチの土層断面(第6図 b-b')では溝の掘り方は認められないことから、周辺の造成にあわせて石材が埋設されたと考えられる。造成土中から瓦や明治期の陶磁器が出土していることから、明治期のものと推測される。

SK01 来待石の石材を四辺に組み合わせた土坑で、石組みの内法は 56cm四方である。北・東辺では石材は 1 段のみであるが、南・西辺では 2 段に積まれており、本来は四辺とも 2 段積みであったと考えられる。明治期の陶磁器片やガラス片などが出土しており、明治期の遺構と考えられる。

S01 近代造成土の掘削中に検出した。幅 1.5 m、長さ 1.8 m 以上の木材を横たわらせており、その材を受けるように来待石の切石が置かれていた。こうした構造から、建物など構築物の土台、地覆と考えられる。材と切石との間には木片や瓦(第10図3)で隙間が埋められていた。平面的には検出できなかったが、調査区壁面の土層から深さ 30cm 程度の掘方内に埋設されたことが分かる。

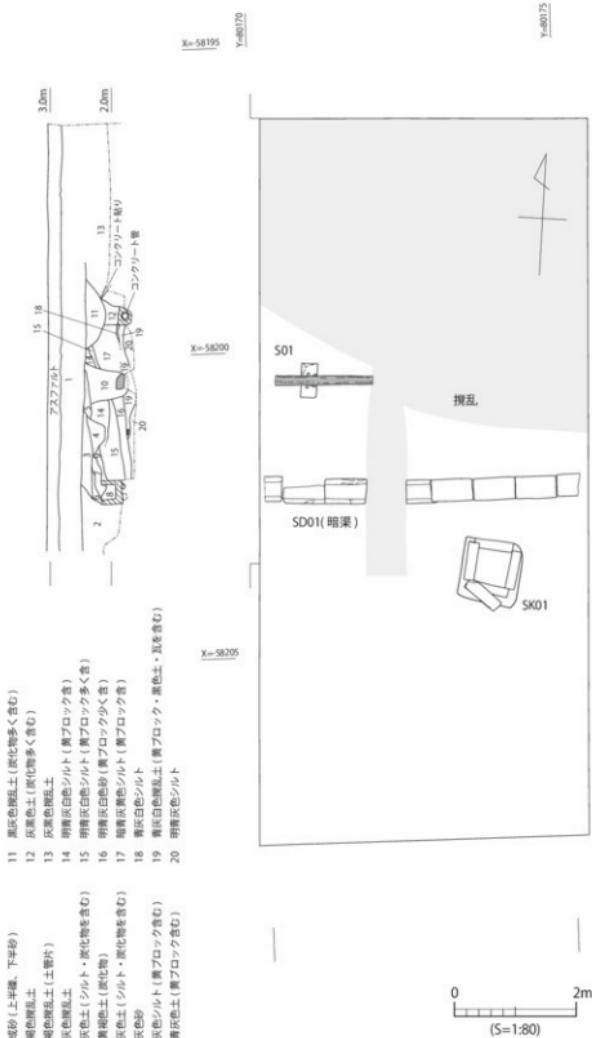
2. 下層の遺構(第7・8図)

上層の近代遺構を調査したのち、下層確認のため調査区南側の一部を重機で 1 m 以上掘り下げたが、近世の遺構面は確認されなかったため、矢板の打設後に工事立会を行うこととした。重機により近代造成土を取り除いたところ、大型の石積み遺構が確認されたため、全体を検出し、遺構内埋土を掘り下げて、記録作業を行った。

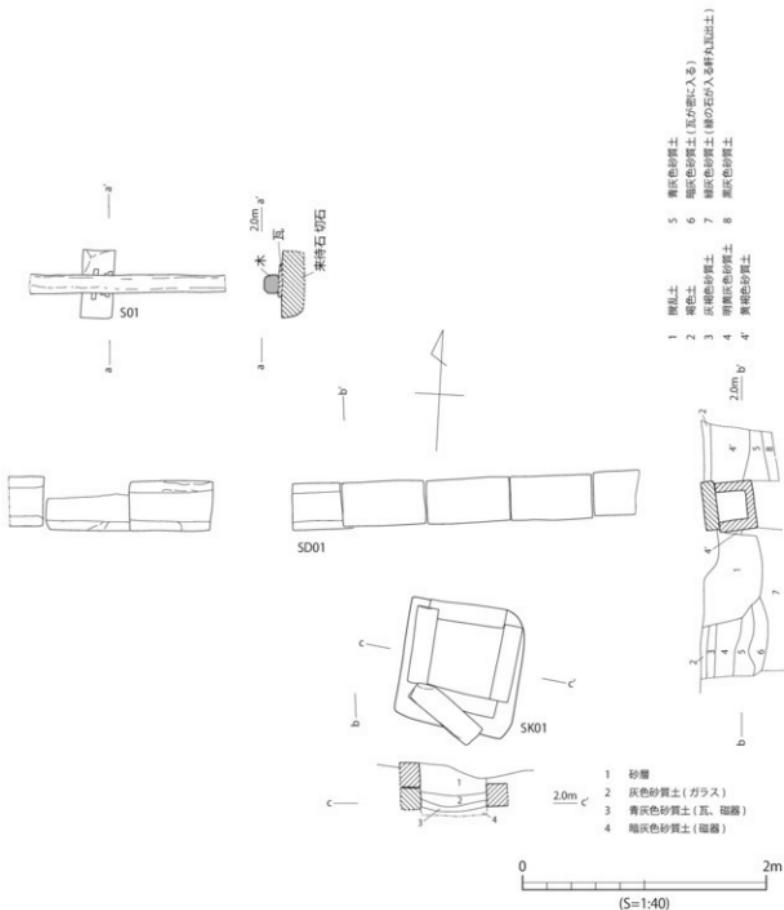
石積み遺構 調査区南側で、地表面から約 1.3 m 下で検出されており、石積み上端の標高は 1.78 m である。平面形は L 字形で、規模は南北 5.7 m 以上、東西 3.6 m 以上、残存高は 1.7 m だが、遺構の一部のみの確認で、上面は近代の造成で壊されているため、本来の規模・形状は不明である。

石積みは打込接乱積み工法で築かれている。西側の石積みは、栗石の上に胴木を敷いて杭で固定し、その上に石が積まれているが、北側の石積みでは胴木がない。石材は最大約 100cm × 70cm の割石が用いられ、白色系の矢田石と呼ばれるもののほか、淡い赤色系の大庭崎石も一部に見られる。矢穴やノミ痕などの加工痕が観察できる石材もある。石積み背後には裏込石が充填されている。北側の裏込めの清掃中に肥前系染付碗(第9図1)が出土した。上層の近代造成土に混入していたものでないとすれば、遺構の時期を考える手がかりとなる。

北側石積みには長さ 1.7 m、幅 1.7 m 以上の 4 段の階段がある。最下段上端と底面との間には 1 m ほどの段差があり、石積みの下に降りるには適さない構造である。上 3 段は来待石製の切石で造



第5図 1区上層遺構配置図

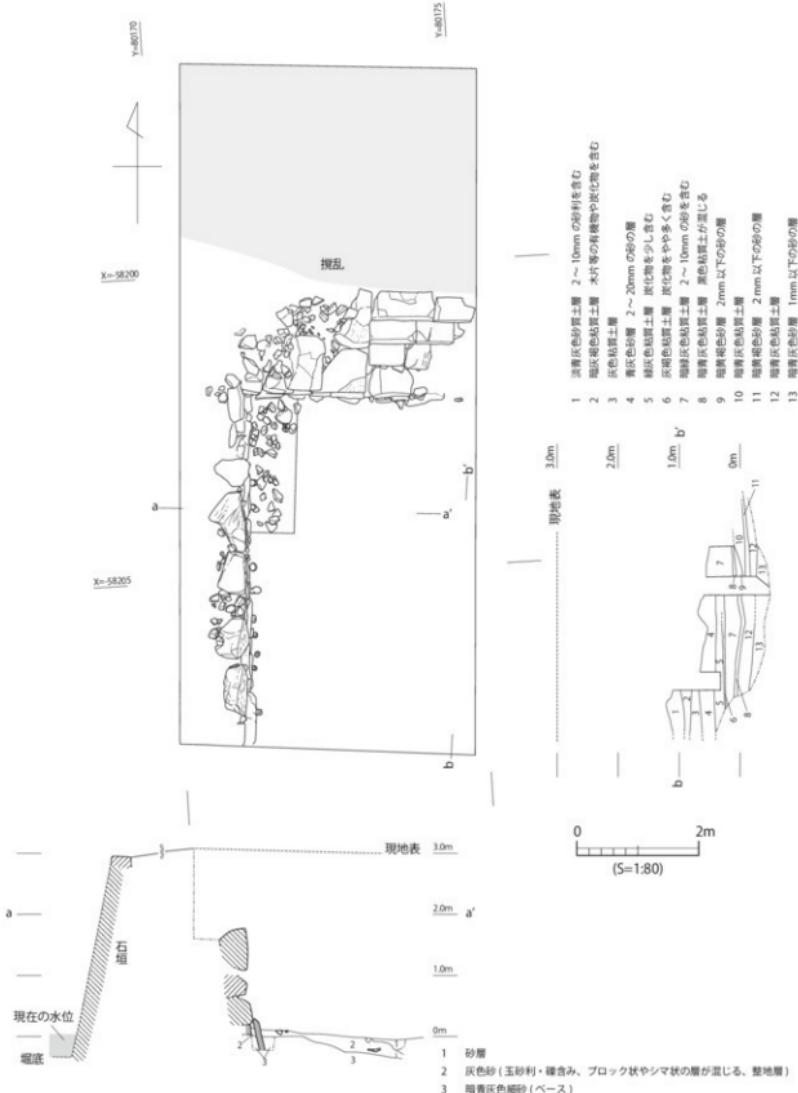


第6図 1区上層遺構実測図

られていることから、階段は構築当初のものではなく、改築時に付設されたと考えられる。

石積み遺構内の底面は、石積直下では標高が0～0.1mだが、南東側(第7図b-b')では標高-0.5mまで掘削しても確認できず、中央が深くくぼんでいたと推測される。断ち割りや、北東隅の一部を面的に掘り下げた結果、基盤層である青灰色シルト層の上に、玉砂利・礫を含む土で整地されていることが分かった。

埋土上層は青灰色砂質土層(第7図b-b'1層)で、瓦や近世末～明治期の陶磁器を多く含んでおり、人為的に埋め戻された層と考えられる。その下には青灰色砂礫層(4層)などが堆積している。下層(5層以下)は砂層と粘質土が互層状になっており、ラミナ構造が観察されることから、湛水状態で堆



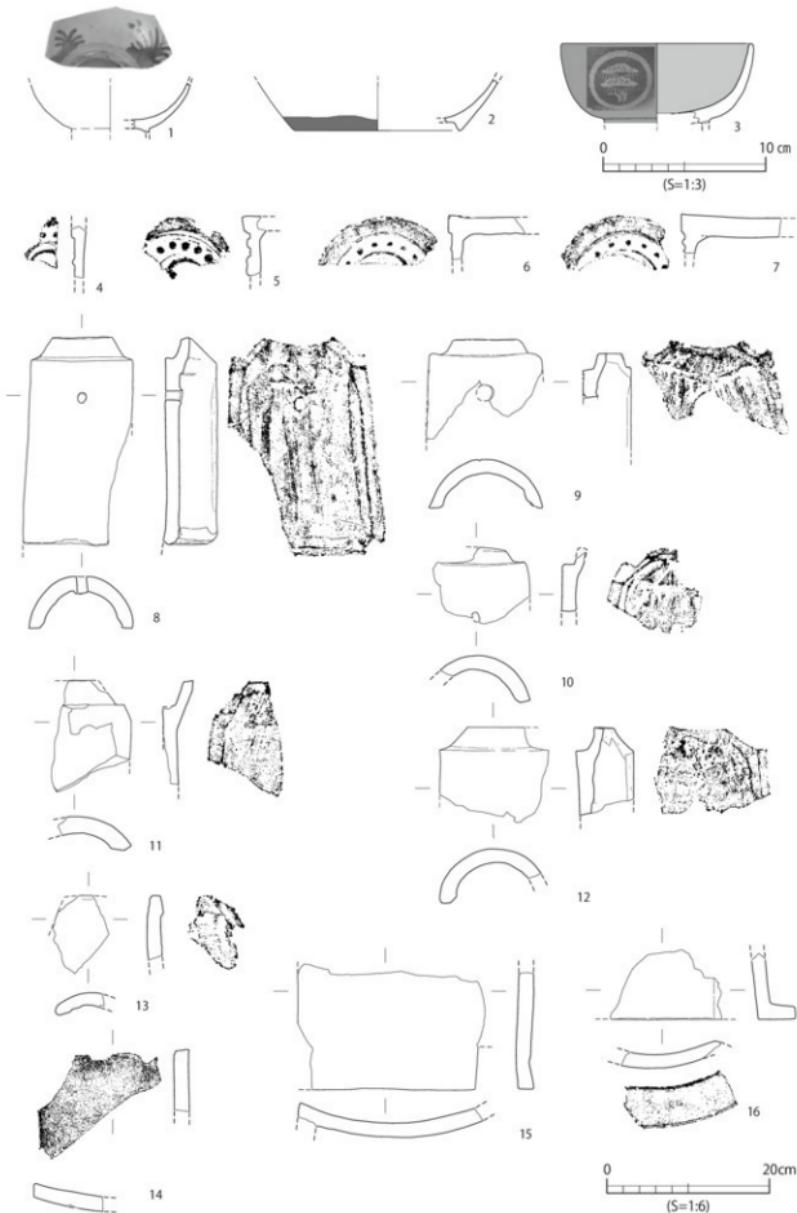
第7図 1区下層石積み遺構実測図



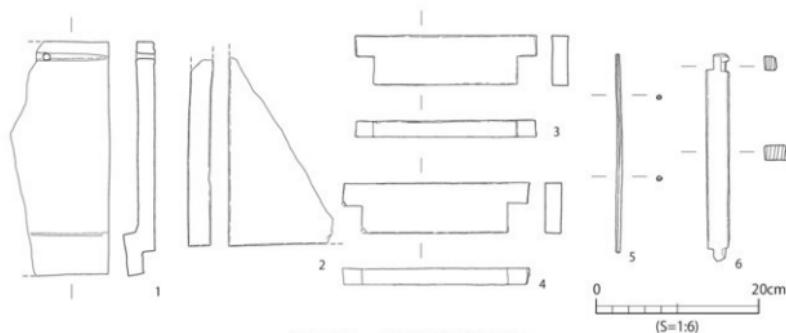
第8図 1区下層石積み遺構実測図2

積したと考えられる。下層では木製品などが出土している。

この遺構の北側は県庁建設時に掘削されているが、この部分の土層（図版7下）の観察から、石積み遺構はいわゆる「松平期」の造成以後に構築されたことが分かる。また、この地点では築城以前の黒色粘質土層（第4図16層に対応）は認められず、旧河道の堆積層や基盤層の青灰色シルト上面が東側に下がっている状況が観察できた。こうしたことから、この遺構は旧河道上で地下水の



第9図 1区出土遺物実測図



第10図 1区出土遺物実測図

通り道となる部分を選んで設けられた可能性も考えられる。

遺構の性格については、内部に水を湛えていたこと、近世の城絵図には当該地に「御池」の記載があることから、池と推測される。遺構の時期を特定する手がかりは乏しいが、構築面や裏込め清掃時に出土した染付碗から17世紀末以降に構築され、明治期には埋め戻されたと考えられる。

3. 出土遺物（第9・10図、図版35～38）

陶磁器 9-1は、17世紀末ごろの肥前系磁器の染付碗で、草花文が描かれている。石積み遺構北側で裏込めの清掃中に出土した。9-2は陶器壺の底部片で、明治期のものである。高台の外周に煤が付着している。SK01から出土した。図版38-aは明治期前半の有田焼の染付碗、bは岐阜多治見焼の湯呑、cは野立炉の一部、dは布志名焼の土瓶、eは幕末から明治期の布志名焼の碗、fは明治期の陶器火鉢である。a・b・e・fは石積み遺構の埋土上層から、c・dはSD01付近に設定したサブトレンチで近代造成土中から出土した。

瓦 9-4～7は軒丸瓦の瓦当部が残る破片で、巴文の周りに珠文がめぐる。4・6・7は右回りの巴文、5は左回りの巴文を持つ。9-8～10は丸瓦部の後側に釘穴が穿たれていることから、これらも軒丸瓦と考えられる。9-11～13は丸瓦の破片である。玉縁の隅の切り方に違いがあり、玉縁の隅のみを切るもの（9・12）、玉縁の隅と丸瓦部の隅を浅く切るもの（8）、深く切るもの（10・11）に分類できる。13は玉縁を持たない。14は平瓦もしくは棟瓦で、上面に菊花文の押印がされている。15は袖付の棟瓦、16は軒棟瓦で瓦当は無文である。10-1は棟積みの頂に使用される瓦と考えられる。前側に段を持ち、後側には釘穴が穿たれている。10-2は埠である。10-3・4は道具瓦で、長辺の両端が抉り取られている。

9-4・13、10-4は石積み遺構の裏込めもしくは被覆土から、9-6～11・14・15は石積み遺構埋土上層から、9-5・16は近代の造成土から出土した。10-3はS01の石材と木材との隙間を埋めるために転用されていた。なおこのほかに平瓦も出土しているが、断片的な資料ばかりであったため図示していない（第4表）。

木製品 9-3は漆器碗で、丸に二階松の紋が入れられている。10-5は箸状の木製品である。6は両端がぼぞ状に突出している角材で、上端の突出は片側に削り込みが入れられている。これらはいずれも石積み遺構埋土下層で出土した。このほか、石積み遺構の埋土下層でそぎ葺屋根に使用されたとみられるうすい板材が出土している。

（東山信治）

第2節 第2次調査(2区)

1. 遺構の配置

遺構は、県庁舎の配管やマンホールなどの地下施設により分断された状況であり、改変を免れたところに部分的に残存していた(第11図)。

調査区北側にはSB01とSD01・SS04がある。SB01は、大きな礎石をもつことから大規模な形の礎石建物であったと見られるが、礎石の一部が検出されたのみであり、建物の規模や構造等は明らかでない。SD01は、遺存状況は良好ではないが石組みを伴う溝で、東西方向に延びる。SS04は、礎石の根石で、SD01を切るものであるが、建物の規模・構造は不明である。

調査区中央部には、SD02とSS05がある。SD02は東西方向に延びる素掘りの溝で、S05・S06・S07を切っている。SD01との距離は南6mで、平行に延びる可能性がある。SS05は建物礎石と見られるが、礎石1つが残るのみであり、建物の構造は不明である。

調査区南側にはSD03・SS06・SK01～03がある。SD03は、南北方向に延びる素掘りの溝である。SS06は礎石の根石と見られるが、1つが残るのみであり、建物の構造等は不明である。

2. 建物跡

(1) S B 0 1

基本層序グリッドの12層(黄白色粘土)に当たる12・13層(淡灰褐色粘質土・黄色粘土)の上に50cmほどの盛土があり、その上面の3層(灰色細砂)に営まれた遺構である(第13図中)。

礎石の抜き取り痕であるSS01・SS02と、大形の礎石であるSS03がL字形に並んでおり、SS02とSS03の心々距離は1.8mである(第14図)。SS01とSS02には、礎石の根石と見られる石が残り、抜き取り痕は深さ5cmで浅い皿状に窪んでいる。SS03は、長さ85cm・幅50cmで上面が扁平な礎石で、色調から大海崎石と推定される。東西または南北方向に柱筋が備えられており、SS03の大きさから見て大規模な建物であったことが想定されるが、規模・構造等は不明である。

なおSB01の東側ではP01、P02、P03が検出されており、掘立柱建物の存在も考えられる。

S0B01の遺構面では、白磁と土師質土器皿が出土している(第15図)。1は白磁の椀で、口縁端部が外反する端反りである。17世紀末頃のものと見られる。2は土師質土器皿で、口縁に煤が付着しており、灯明皿として使われたものである。3・4は、S0B01の北東側に設けたサブトレーナ内で出土した土師質土器皿で、遺構面よりは下層の遺物である。

(2) S S 0 4

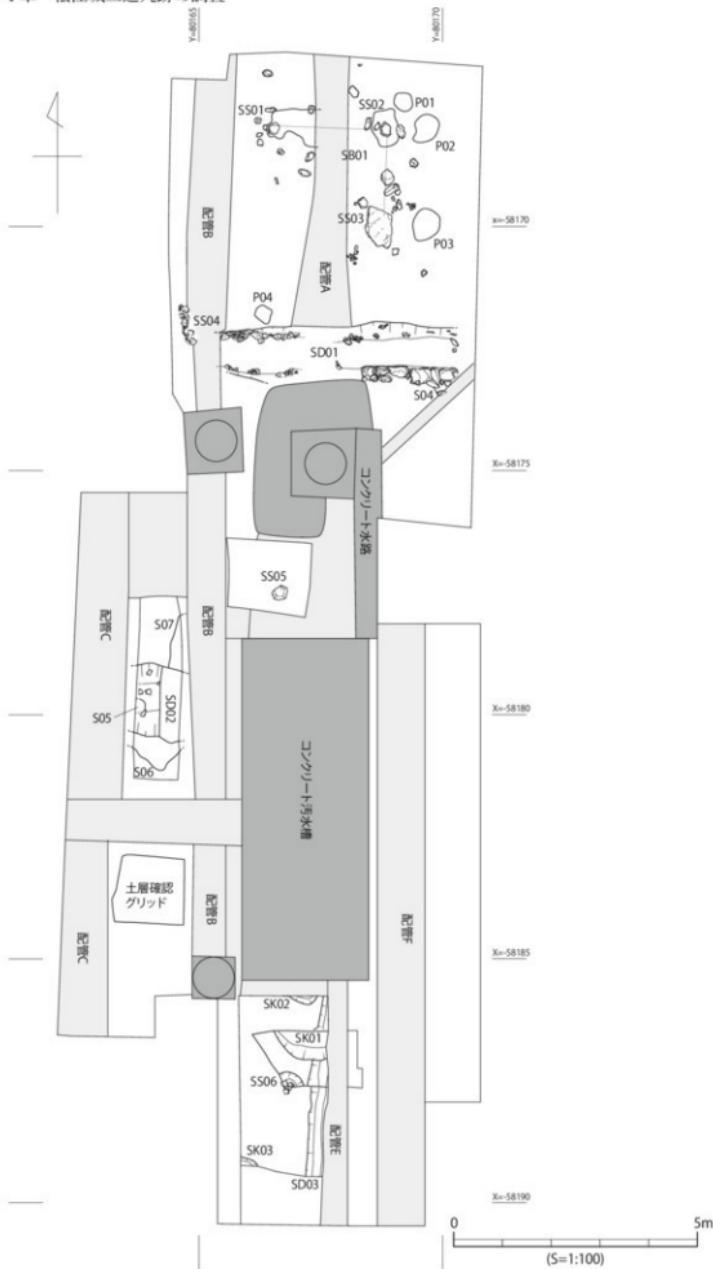
SD01の埋土である11層(暗灰色粘質土)の上に営まれたものである(第12図b-b'断面)。長径60cmほどの橢円形をした土坑の内部に、礎石の根石と見られる石材と灰色細砂(10層)が入る。

(3) S S 0 5

基本層序グリッドの12層に当たる10層(黄色粘土)の上に50cmほどの盛土があり、その上面にある4層(淡黒色粘質土)に営まれた礎石である(第18図)。礎石は、長さ62cm・幅60cmほどの小形のもので、色調から大海崎石と推定される。単独で確認されているため、建物の規模・形状は不明である。

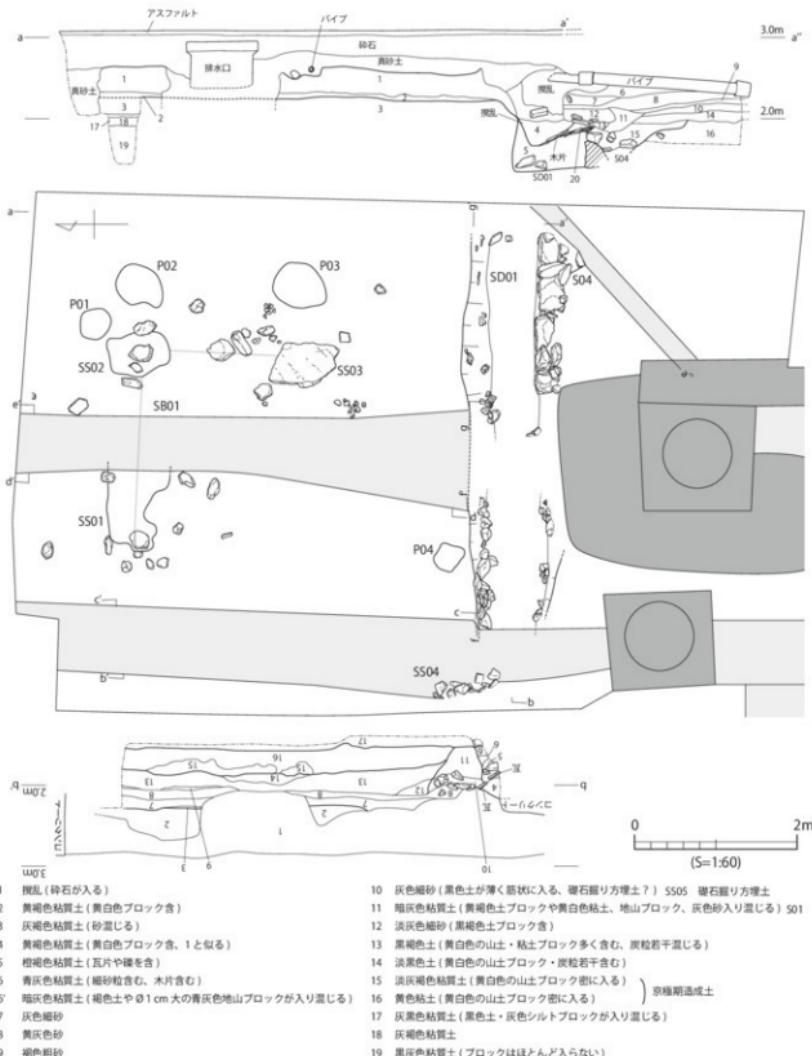
(4) S S 0 6

基本層序グリッドの12層に当たる10層(黄白色粘土)の上に80cmほどの盛土があり、その上面にある3層(暗灰褐色粘質土)に残る遺構である(第22図上右)。現状で長さ50cm・幅35cm・



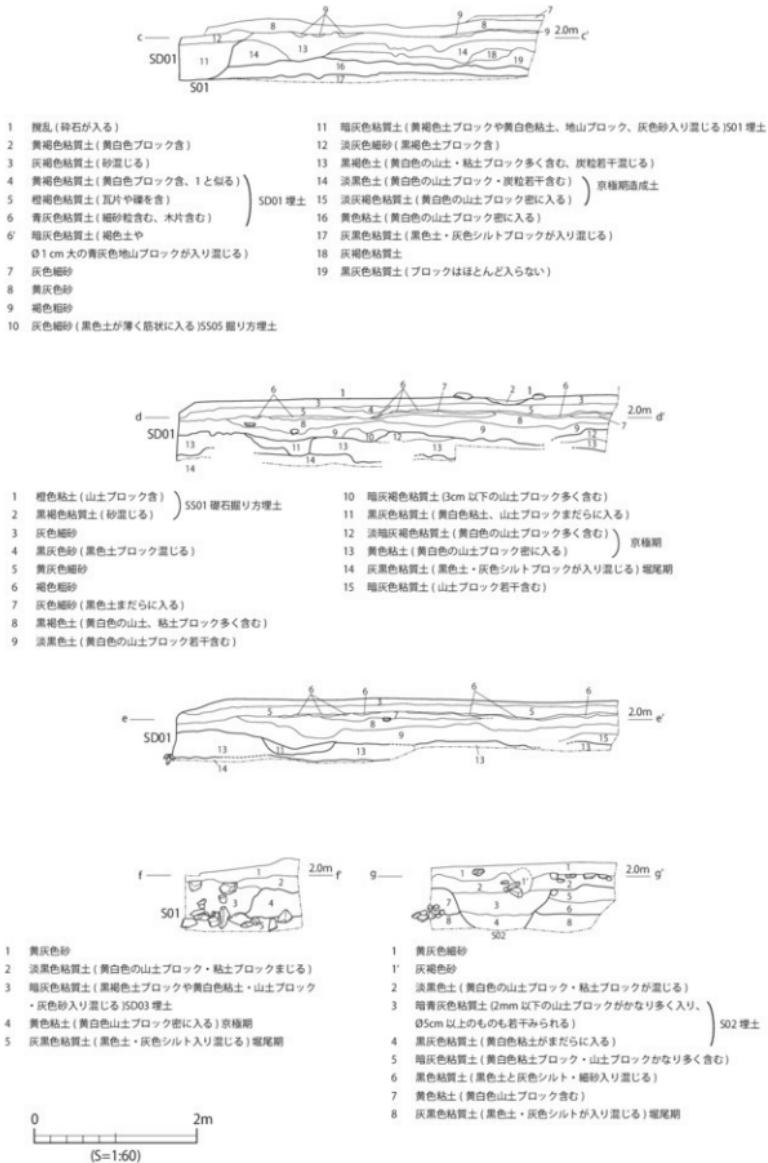
第11図 2区トレンチ配置図

- 1 黄褐色粘土質土(白色ブロック含む)
- 2 灰色粘土(黄色土ブロック含む)
- 3 黄褐色粘土質土(上面は透構面)
- 4 灰褐色砂
- 5 灰色粘土質土(青灰色土・木片含む) SD01埋土
- 6 明灰色粘土(白色土ブロック含む)
- 7 隆起灰色粘土(白色土ブロック含む)
- 8 灰褐色粘土(黄色土ブロック含む)
- 9 隆起灰色粘土(白色土含む、下辺一部黑色土)
- 10 褐褐色土(黑色土粒含む)
- 11 灰褐色粘土質土(黑色土・黒色土ブロック含む)
- 12 黄褐色粘土質土(白色土ブロック含む)
- 13 黑褐色粘土質土(黄白色の山土・粘土ブロック多く含む、炭粒若干混じる)
- 14 灰褐色粘土質土(黑色土・黒色土ブロック含む)
- 15 隆起灰色粘土(木炭層・黑色土粒含む)
- 16 黄白色粘土(大塊白色土ブロック含む)
- 17 黑褐色砂
- 18 隆起褐色粘土質土(白色土ブロック含む)
- 19 隆起褐色粘土
- 20 褐褐色土

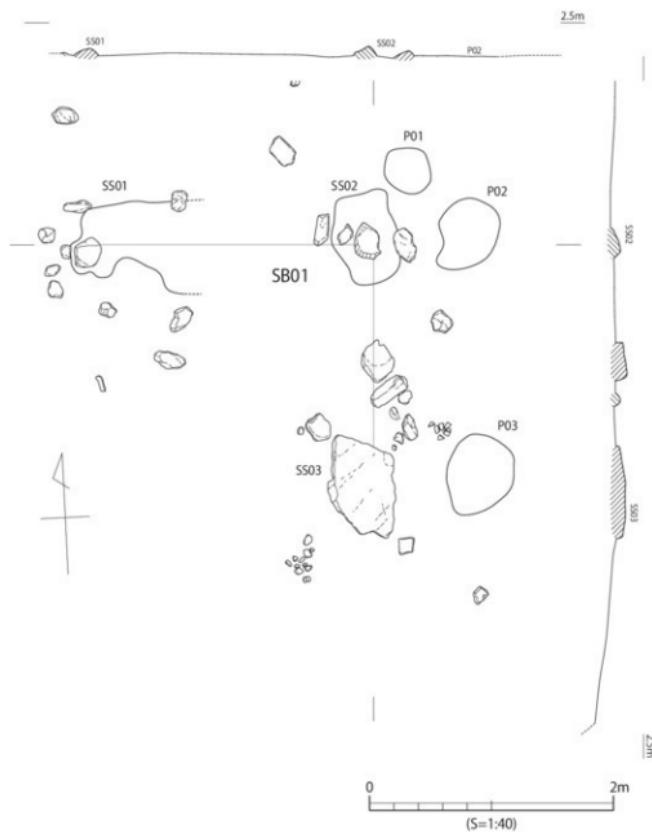


第12図 2区北側構造線調査図

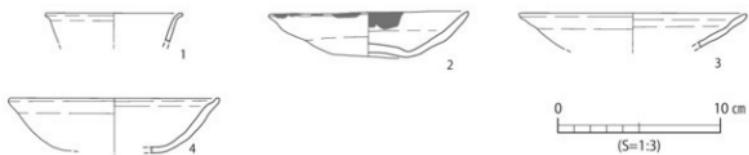
第4章 松江城三之丸跡の調査



第13図 2区北側土層実測図



第14図 2区SB01遺構実測図



第15図 2区SB01付近出土遺物実測図

深さ40cmほどの土坑の内部に、礎石の根石と見られる石材が残る。

3.溝跡

(1) S D O 1

S D O 1の南側に東西に延びる石組の溝である(第16図)。後世の擾乱により遺構面との対応関係は判然としないが、基底部の石は基本層序グリッドの12層に当たる7層(黄白色粘土)を掘り込んで据えられている(SO3:第15図中)。石組は、東側の南辺のみ2段程度が残っており、その他の部分は石材が抜き取られ小さな裏込め石が見られるのみである。溝本来の規模は不明であるが、検出された長さは5mで、南辺石組の前面より北辺下端までの幅は70cm、SD01のある遺構面からの深さは80cmである。横断面形は、底部が平坦で、両壁が垂直に立ち上っている。また、SD01の南辺東端ではSO4が検出されており、溝に取り付く暗渠、または先行する遺構である可能性が考えられる。

埋土は、灰色粘質土(5層:第16図下)のみで、いぶし瓦片が出土している。第17図1~3は、端部に段をもつ丸瓦である。いずれも内面にはコビキ痕があり、端部の隅部は切り落とすことによって成形されている。5・6は平瓦で、いずれも縦方向割れていることから、故意に割り取られて熨斗瓦として使用されていた可能性がある。埋土の上面には調査区の東側を中心に木片が比較的多く溜まっており、その中には第17図8のように板の表面に斜格子が刻まれた土壁の下地とみられるものが含まれる。

なお、SD01の北辺土層を観察すると、基本層序グリッドの12層に当たる4層(第13図ff'断面:黄色粘土)を掘り込んだSO1、同様の7層(第13図g-g'断面:黄色粘土)を掘り込んだSO2があり、この時期の遺構が存在することを確認できる。

(2) S D O 2

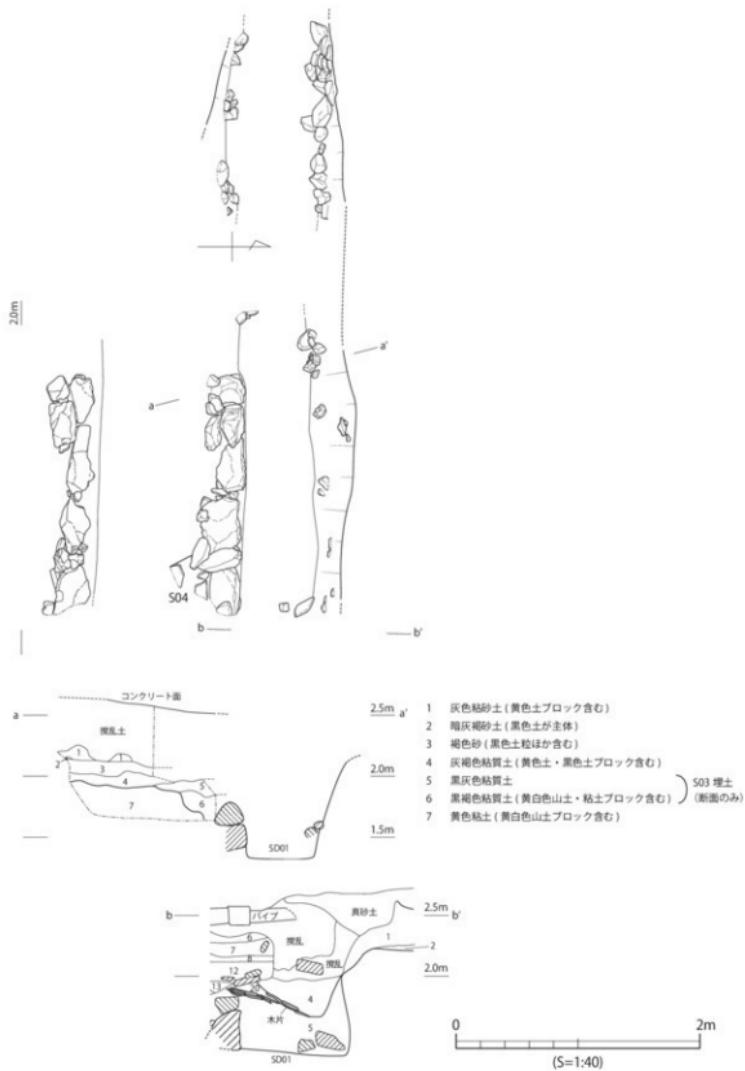
基本層序グリッドの12層(黄白色粘土)に当たる10層(黄白色粘土)の上に60cmほどの盛土があり、その上面の6層(灰色砂質土)から掘り込まれた遺構である(第19図)。東西方向に延びる溝と見られるが、遺構周辺の変更が著しく本来の形状を窺うことはできない。幅は上端200cm、下端75cm、深さは75cmである。横断面形は、底部が平坦で、両壁が外傾しながら立ち上がり、逆台形状を呈する。

埋土は、上層より5層(暗灰色粘質土)・11層(暗褐色砂)・12層(灰色粘砂土)・13層(灰色粘質土)・14層(暗灰色粘質土)の順となっており、12層にはいぶし瓦片が含まれていた。

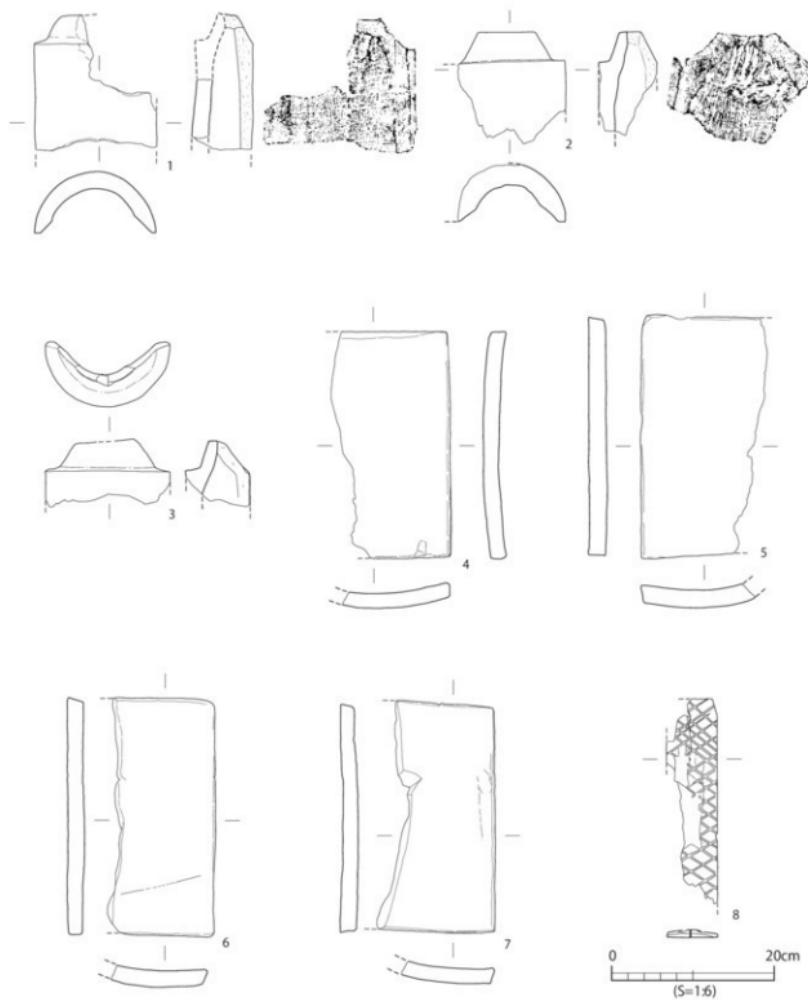
なお、SD02は、SD10層上面でSO6とSO7、溝底面でSO5を切っており、これらより後に営まれたことが分かっているが、切り合い関係にある遺構がどのような性格をもつものであるかは不明である。

(3) S D O 3

基本層序グリッドの12層(黄白色粘土)に当たる10層(黄白色粘土)から掘り込まれた遺構である(第22図上)。南北方向に延びる溝で、検出された長さは3.7m、幅は上端30~35cm、下端15cm、深さは22cmである。埋土は、12層(淡黒色粘質土)のみである。唐津皿が出土しており、底部は削り出し高台で見込みの胎土目から17世紀前葉のものである(第20図1)。なお、この付近の上層では土師質土器皿も出土した(第20図2)。



第16図 2区 SDO1 実測図

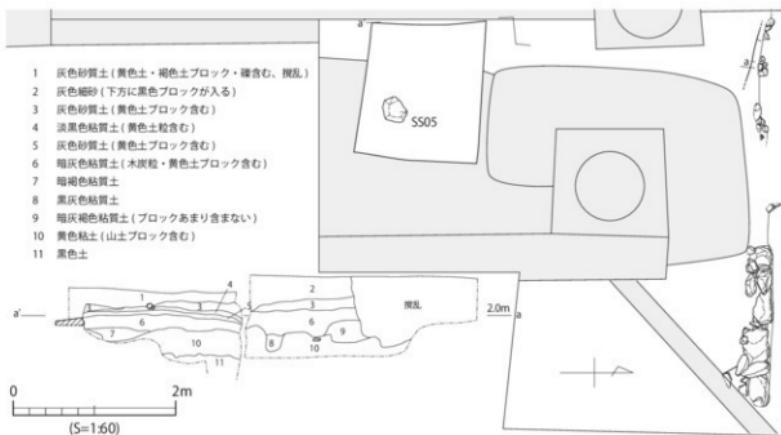


第17図 2区SD01出土遺物実測図

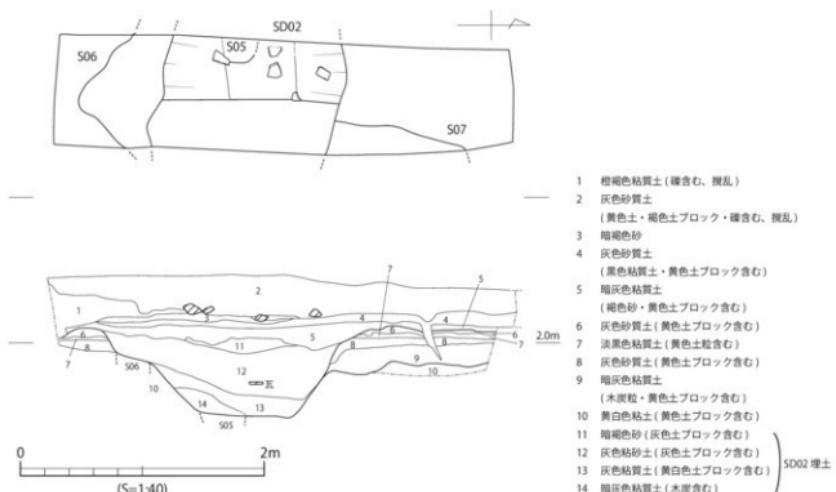
4. 土坑

(1) SK01

基本層序グリッドの12層(黄白色粘土)に当たる10層(黄白色粘土)の上に30cmほどの盛土があり、その上面の3層(灰色砂質土)から掘り込まれた遺構である(第22図上)。南に隣接するSS06は、その上層の7層より掘り込まれていることから、SS06に先行するものと見られる。遺構の一部が



第18図 2区中央土層実測図

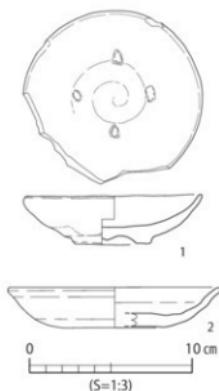


第19図 2区SD02実測図

検出されたのみであり、形状等は不明であるが、現状で長さは110cm・幅60cm・深さは50cmである。埋土は、A層（茶褐色質土）・B層（灰色粘質土）の2層である。

(2) SK02

基本層序グリッドの14層（灰黒色粘質土）に当たる3層（青灰色シルト）で確認された遺構である（第22図）。遺構の一部が検出されたのみであり、形状等は不明であるが、現状で長さは60cm・



第20図 2区SD03出土遺物実測図

幅20cmである。

(3) SK03

基本層序グリッドの14層（灰黒色粘質土）に当たる3層（青灰色シルト）から掘り込まれた遺構である（第22図下）。遺構の一部が検出されたのみであり、形状等は不明であるが、現状で長さは35cm・幅15cm・深さは25cmである。

5. 遺構に伴わない遺物

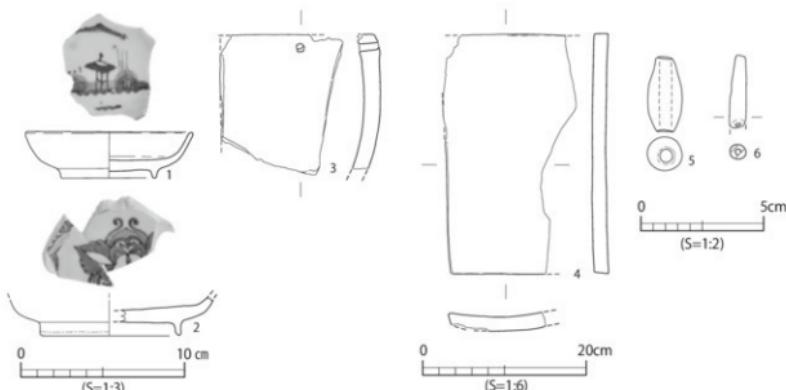
遺構に伴わない遺物には、肥前磁器（1・2）、いぶし瓦（3・4）、土錘（5・6）がある。

肥前磁器は、1が皿、2が八角鉢とともに見込みに呉須で文様が描かれており、19世紀中頃のものと見られる。

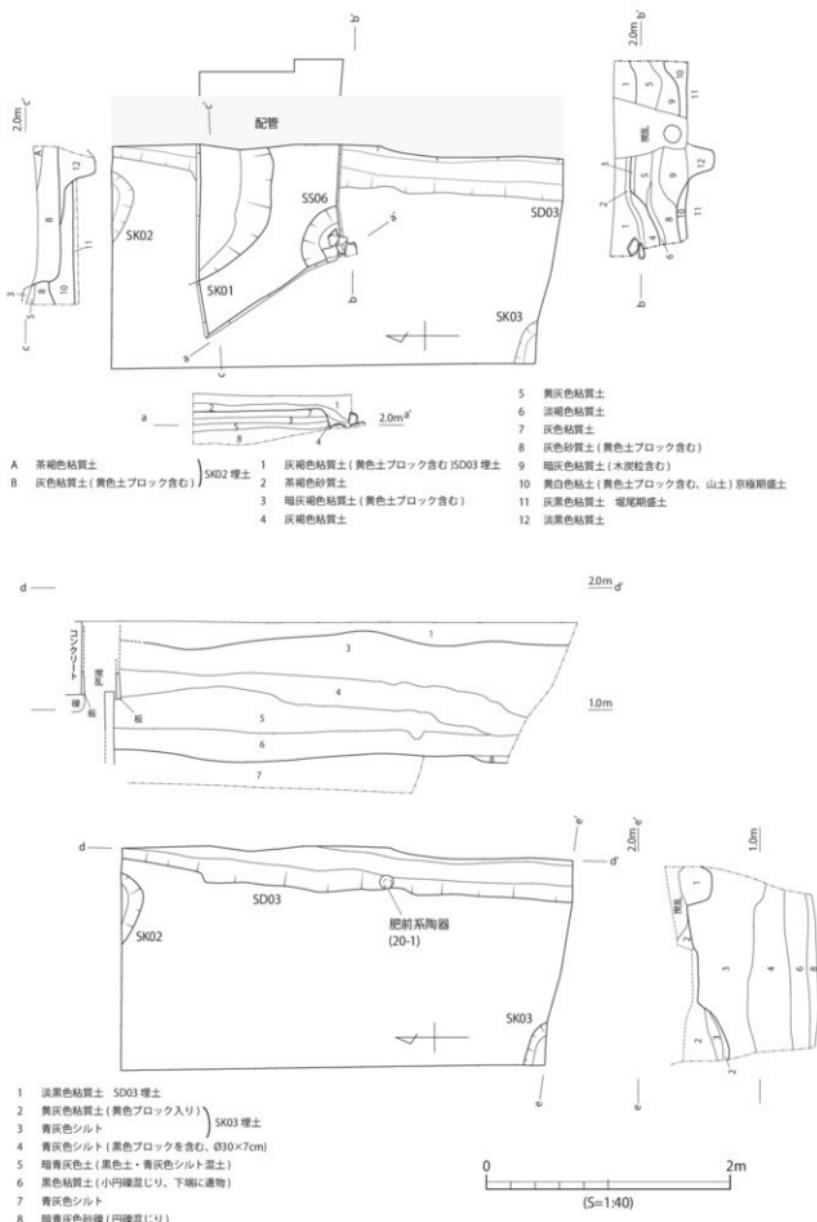
3は一方の端部に焼成前に孔が空けられ、大きく外反するもので、破風のケラバに使われたものと推定される。

4は平瓦であるが、半分に割られており、熨斗瓦と推定される。5・6は、ともに基本層序グリッドの16層（黒色粘質土）、またはこれに相当する層から出土したもので、三ノ丸造成以前のものと見られる。5は、長さ3.0cm・幅1.4cm・重さ4.7g、6は長さ2.9cm・幅0.7cm・重さ1.4gである。

（角田徳幸）



第21図 2区遺構に伴わない遺物実測図



第22図 2区南側上層・下層実測図

第3節 第3次調査(3区)

調査の経緯 3区は2区の北東部に県庁舎に囲まれた中庭状の場所に位置し、県庁耐震補強施設の基礎工事が予定されていた箇所である。対象区域は約700m²であったが、工事立会の過程で対象区域の大半は過去の県庁舎建設の際の基礎工事で破壊されていることが判明したため、実際に調査対象とした範囲は破壊を免れていた約18m²の部分にすぎない。

調査は平成25年7月22日と9月17・18日の延べ3日間にかけて実施した。調査は工事と平行して実施し、重機掘削と人力掘削を併用して行った。その後、島根大学法文学部大橋泰夫教授らを迎えて調査指導会を開催し、土層観察用に残していた鞋も総て掘りきるよう指導を受けた。これを受け9月17日から調査を再開し、9月18日に総ての調査を終了した。

基本層位(第28図)

当調査区の基本層位はアスファルトの下に約60cmの攢乱土・造成土を挟んで黄褐色～黄灰色系の土(1層)が約60cmの厚さで堆積していた。これは隣接する2区との土層と対応関係からみて、松平後半期の造成土に対応する層と考えられる。その下には厚さ約30cmの暗灰褐色系の粘質土(2層)が堆積していた。やはり2区との対応関係からみて松平期の造成土と考えられる。その下層は淡オリーブ色・淡灰色の細砂層が約40cm堆積していた。遺物は出土していないが、他の調査区との対応や層位的関係からみて堀尾～京極期に相当する比較的古い段階の造成土と考えられる(3層)。

その下層は、松江城下町遺跡の調査で通称チョコ層と呼ばれる築造以前の土層である黒色粘土(5層)が厚く堆積していた。そして、この5層を掘り込んで大溝(SD01)が掘り込まれている。この溝内埋土の黒灰色系の堆積層を4層と呼称しておく。5層上面で検出されたこの溝は、他の松江城下町遺跡の調査事例から築城時に伴う大溝であった可能性も考慮される。

5層は3層に大別され、最上層の5-a層は下層の細砂基盤層(6層)の巻き込みブロックを多く含んでいることから、松江城築城以前の水田耕作土である可能性が高い。5層の下層には灰色シルト質細砂の基盤層(6層)が存在している点は、他の城下町遺跡の調査区とほぼ同じ様相を示す。

第1面(第23図)

黄灰色土の上面に形成された遺構面である。遺構面のレベルは標高2.6m前後を測る。遺構面からは南北方向に走る溝状の落ち込みを検出したのみである。この溝状遺構の埋土は黄色ブロックを含む黒褐色であるが、調査区境界であったため今回は面的掘り下げを行っていない。

第2面(第24図)

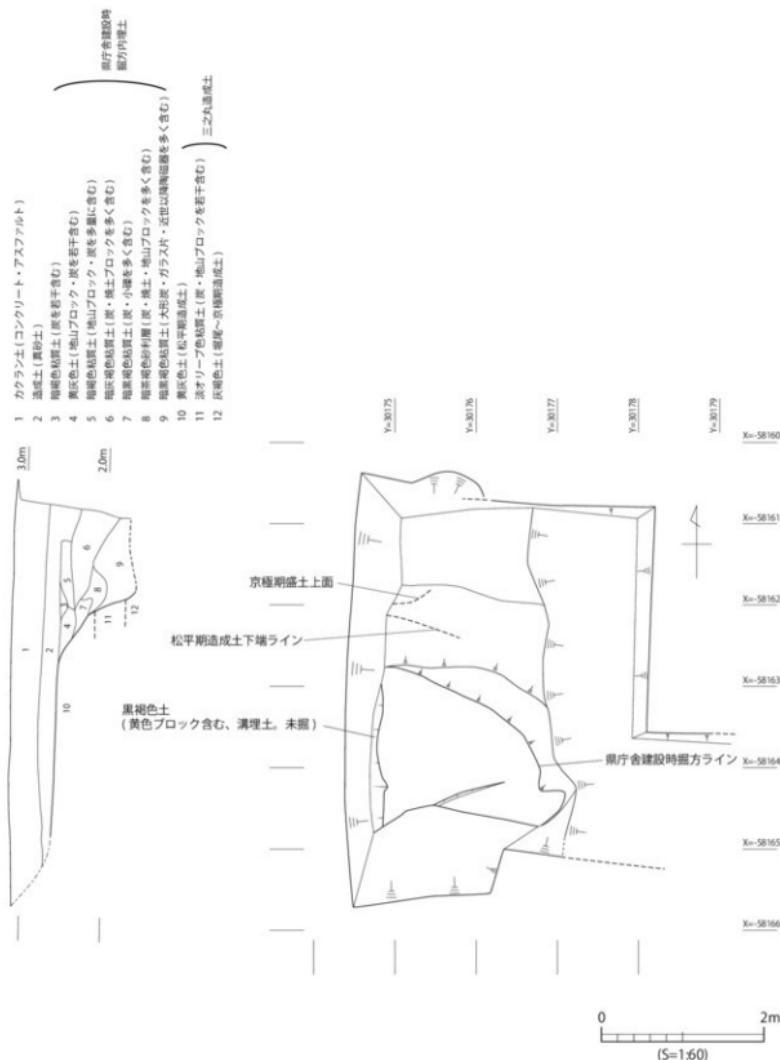
1層を除去したのち、暗灰褐色粘質土の造成土上面を検出した面である。遺構面の標高は2.1m前後を測る。当遺構面では遺構は検出されていないが、上面から瓦片や板材が出土している。

第3面(第25図)

堀尾～京極期の造成土と想定される淡灰褐色系細粒砂層の上面で、遺構面の標高は1.7m前後を測る。遺構・遺物は検出されなかった。

第4面(第26図)

大溝(SD01)埋土の上面に相当する遺構面で、標高1.3m前後を測る。遺構面からは幅3m以上の大溝を検出している。このうち大溝の最上層の埋土である4-a層は、黒色粘土と灰色細砂の混土層であり、最終的に人为的に埋め立てられた層である可能性が高い。



第23図 3区 第1面実測図



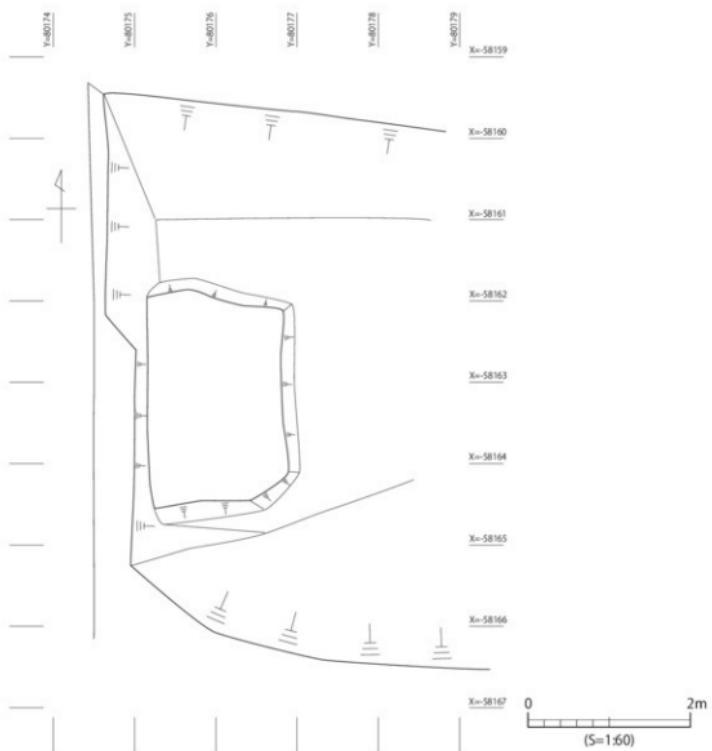
第24図 3区 第2面実測図

なお、調査区東端では灰褐色砂質土が部分的に存在し、その部分から人頭大の自然礫1点が検出された。当初建物の礎石の可能性も想定したが、石の表面とは柱を建てるのに適した平坦面は全く認められられないことからその可能性は低く、またこれに関連した他の礎石なども認められない。性格については不明である。

SD01 (第27図)

概ね東西方向に走る大溝で、溝の北側肩部分から溝底面から南へ立ち上がる部分を検出している。溝の幅は現状で1.6m前後を測るが、溝底面中央で折り返し復元すると、上場での幅は4m近い規模の溝であったと推察される。深さは1.0mを測る。溝の上半は比較的緩やかに掘り込まれているが、下半部は箱堀状に急角度で掘り込まれている。溝の方向は小面積の調査のため不明瞭であるが、南西・北東方向に延びると推定される。

埋土は上下2層に分層され、上層は先述のとおり人為的に埋められた可能性が高い。下層には上層に似るが、より細砂ブロックを多く含む土層(4-b層)が堆積している。現状では、自然堆積



第25図 3区 第3面実測図

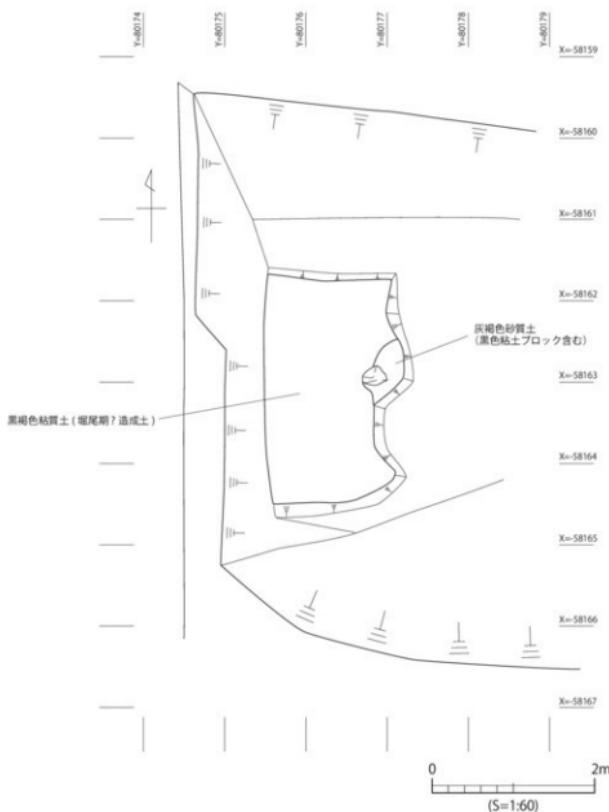
か人為的に埋め立てられたものかどうかは判断し難い。遺物は出土していないが、層位的関係からみて堀尾氏による松江城築城当初に掘削されたものか、またはそれ以前に掘削された大溝であると考えられる。

第5面（第28図）

基盤層である灰色シルト質細砂層(6層)の上面に相当する。遺構面の標高は、溝の外側の部分で0.6m前後を測る。

6層上面では、上層のSD01にはほぼ沿うかたちで東西方向に長く延びる溝状の遺構を検出した。この溝状遺構は、斜面の傾斜が比較的緩やかなことから、自然河道状の落ち込みであった可能性が高い。従って、本来自然河道があつて埋没した箇所を再び利用するかたちで大溝(SD01)が掘削されることになる。溝の底面は標高-0.2m前後を測る。

5層は大きく3層に分層され、最上層の5-1層は先述のとおり築造以前の水田耕作であった可能性が高い。5-b層、5-c層は松江城下町遺跡でよくみられる典型的な築城以前の自然堆積層である



第26図 3区 第4面実測図

黒色粘土層（通称チョコ層）である。自然河道の底面からは土師質土器1点が出土している。

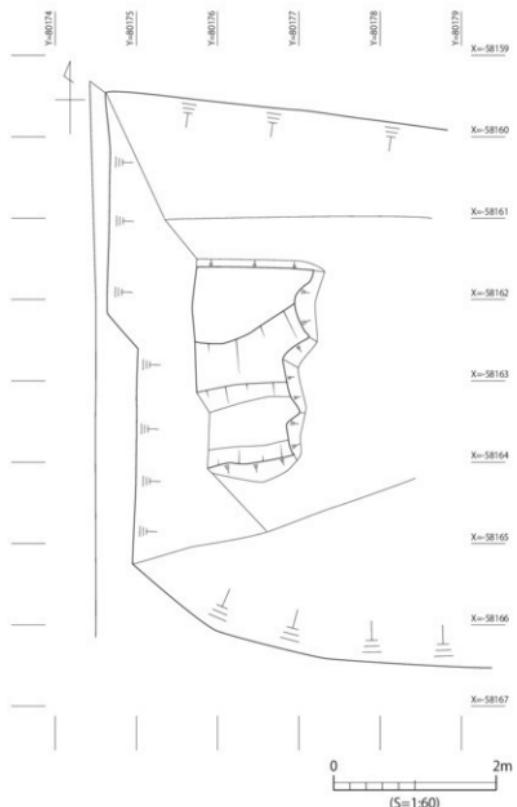
出土遺物（第28図）

遺物は先述のとおり自然河道底面直上から土師質土器1点が出土した。土師質土器は壺の底部で底面に回転糸切り痕を残し、外面に回転ナデによる段差が認められる。

小結

当調査区は、過去の県庁舎建設によって対象地の大半が破壊されており、調査できた面積はわずか18m²にすぎない。こうした小面積の調査であるにもかかわらず、築城期から江戸期後半の各時期にわたる造成面が明瞭に確認され、さらに築城期または以前の大溝と自然河道が検出されたことは貴重な成果として特筆される。

大溝の性格については時期が明らかでないため明確な言及はできない。仮に築城に伴うものであれば、城内に位置している点や層位的状況や遺物がほとんど含まれず比較的短期間で人為的に埋め

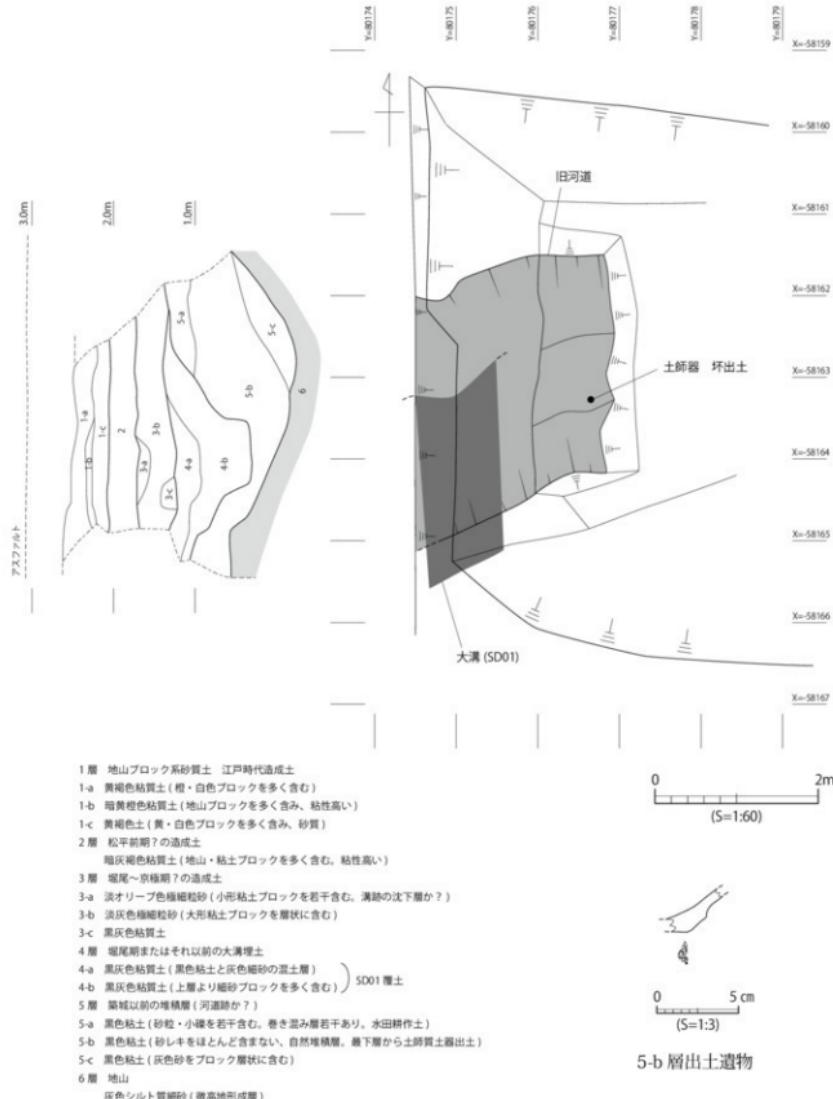


第27図 3区 大溝(SD01)実測図

られた可能性が高い点などからみて、築城時の際に資材運搬等の運河として掘削された可能性も考慮される。その際に、先述のとおり旧河道部分が選地され再利用された可能性も一案としては想定されよう。また、築城以前の当該地が水田として利用されていた可能性が高いことが判明したことでも重要な調査成果である。

このように、今回の調査は小面積の調査でありながら松江城内における歴史的変遷の一端が解明され、今後の松江城の研究や保護に際して重要なデータを提供することができたものと思われる。

(池淵俊一)

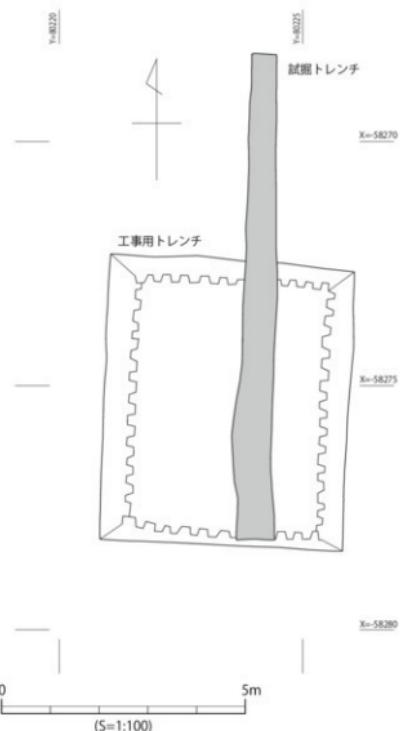


第28図 3区 第5面実測図

第4節 第4次調査(4区)

調査の経緯 4区は県分庁舎の北側の現県庁駐車場に位置する調査区である。当調査区は本庁舎の3区と同様に、分庁舎の非常用発電機の設置に伴うオイルタンク設置が予定されていた箇所である。

当該箇所は、江戸時代の絵図や明治期の地図によると松江城内堀の南側石垣が存在する場所であり、当該石垣の保護のため調整を図る必要があった。このため、県管財課と協議の上、当該石垣をオイルタンク設置位置から除外するため、石垣位置の確認を目的として平成26年1月10日に試掘確認調査を実施した。調査は分庁舎北駐車場に南北方向に長さ10m、幅0.8mのトレンチを設定し、小型重機により掘り下げを行った。この結果、調査区内には石垣は存在せず、石垣はトレンチより南に位置することが明らかになったことから、内堀内にオイルタンクを設置し、石垣の保護を図ることとなった。ただ、オイルタンクの設置により内堀底面以下の掘削が想定されたため、掘削範囲については工事立会を行うこととし、同年2月20日に掘削工事に伴う工事立会を行った。



第29図 4区 トレンチ配置図

試掘調査の結果（第30図）

試掘調査は先述のとおり石垣の位置確認を目的として、南北方向に縦10m、幅0.5～0.8mのトレンチを設定した。

当調査区の基本層位は、アスファルト直下にコンクリート路面やバラス層を挟んで暗灰褐色粘土が60～90cmの厚さで堆積していた。この土層は被熱痕を顕著に残す木材を多量に含んでおり、昭和20年のいわゆる県庁焼き討ち事件かまたは昭和31年の県庁火事焼失の際に埋め立てた造成土と想定される。その下層には厚さ30～50cmの灰褐色粘質土が堆積している。この層も出土遺物からみて近世以降の堆積層と考えられる。その下は灰色シルト質細砂に達している。灰色シルト質砂層上面のレベルは標高1.1mを測る。

工事立会の結果（第31図）

先述のとおり2月20日にオイルタンク設置部分の掘削工事に伴い工事立会を行った。予定地内は上層に厚さ2m以上の造成土、その下に近世以降の瓦礫を含む黒色砂質土が1m以上堆積し、堀

底の基盤層である淡灰色シルト質細砂層に達していた。基盤層上面にレベルは-1m前後を測る。

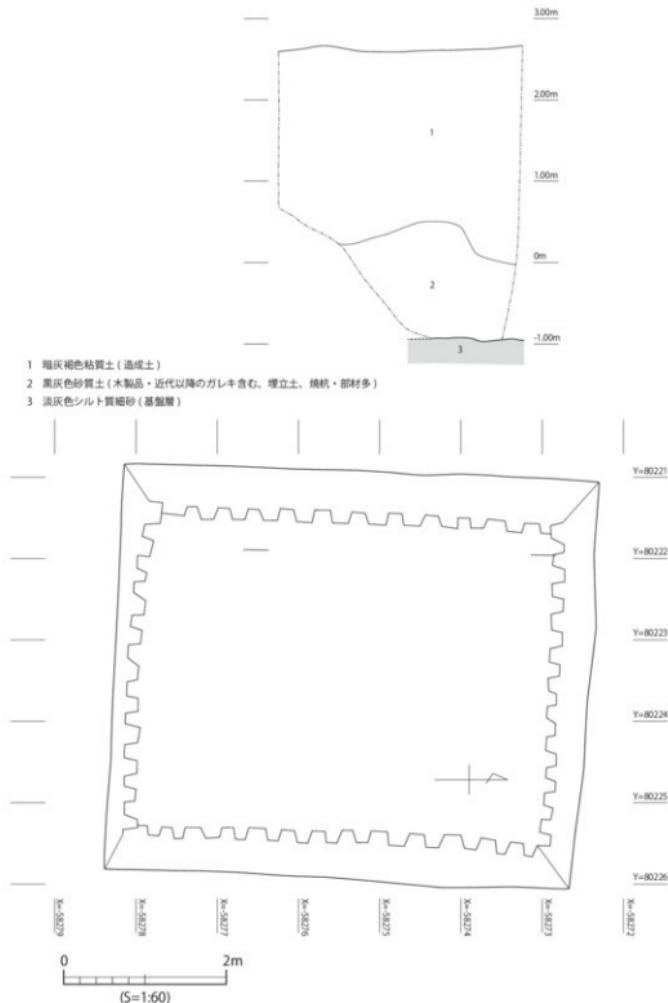
出土遺物（図版42）

遺物は近世瓦、煉瓦、杭などが出土している。煉瓦は縦22.7cm、横10.8cm、厚さ5.8cmを測り、表面に「S・Y・K」の刻印が認められるものである。

（池淵俊一）



第30図 4区 試掘トレンチ実測図



第31図 4区 工事立会トレンチ実測図

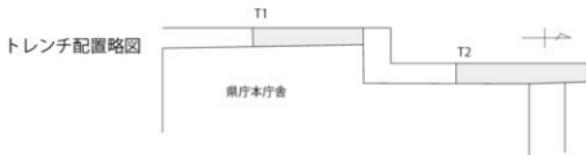
第5節 工事立会調査

1. 県庁本庁舎裏の調査

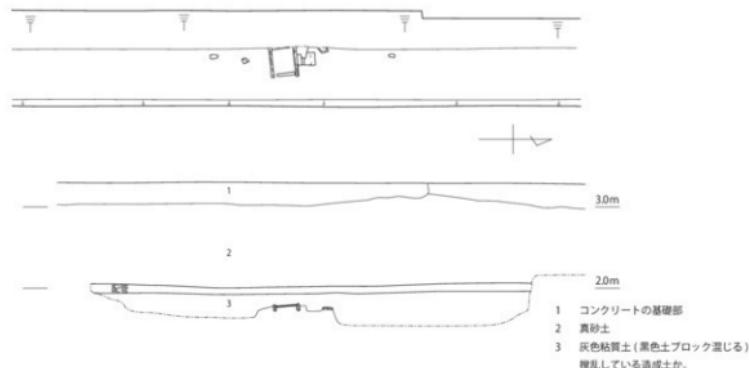
県庁本庁舎西端の配管工事に伴って工事立会調査を2ヶ所で行った(第32図)。

T1では、コンクリート基礎の下に厚い真砂土による盛土があり、その下に配管が通っていた。それより下層は灰色粘質土(3層)となり、その上面付近で瓦片や木棒が出土した。灰色粘質土は黒色土がブロック状に混じっているが、整地痕跡がなかったことから、2次的に動かされた土の中に遺物が入ったものと判断した。

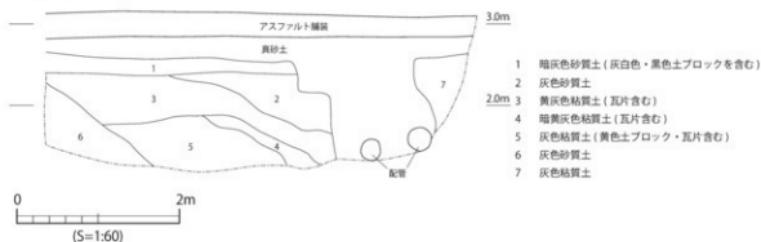
T2は、アスファルト舗装の下に薄く真砂土が盛土されており、その下には北側に傾いた状態で灰色系の粘質土が斜めに堆積していた。整地された痕跡はなく、2次的に動かされた土層であると判断した。



T1 東壁



T2 西壁

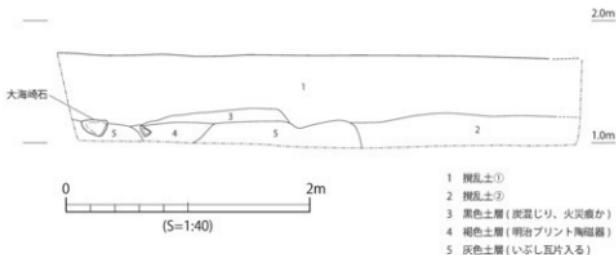


第32図 県庁本庁舎裏 T1・T2 実測図

2. 県警察本部裏

県警察本部裏の配管工事に伴って、工事立会調査を1ヶ所で行った（第33図）。工事範囲よりやや深いアスファルト舗装の下70cmまで掘り下げたところ、調査区西半部は既に搅乱を受けていたものの、東半部で大海崎石と炭が混じり火災にあった痕跡と見られる黒色土（3層）が確認できた。東半部の遺構面の標高は1.2m前後であったが、これより下層には工事範囲が及ばないところから、調査はこの面までに留めた。

（角田徳幸）



第33図 県警本部裏トレンチ土層図

第5章 松江城下町遺跡（殿町128）の調査

第1節 調査の経過

松江城下町遺跡（殿町128）は、その名のとおり松江市殿町128番地に所在する。調査区は県庁非常用発電機の地下オイルタンク設置が予定されていた、県東庁舎中庭の約30mの範囲である。当調査区の所在する殿町128番地は、これまで報告してきた各調査区が松江城三之丸内に所在しているのに対し当調査区は城外に位置しており、文政期の城下絵図では外御殿や馬屋及び家臣団の屋敷地となっている。

調査は平成26年2月14日～19日にかけて実施し、実働調査は延べ4日である。調査区は現在分庁舎の駐車場として利用されている場所を6.3m×4.8mの範囲でアスファルトを切断し、矢板打設後にその内部の調査区内を重機掘削と人力掘削を併用しつつ調査を実施した。調査期間中の2月18日には、松江市教育委員会文化財課の赤澤秀則係長・川上昭一主任らの調査指導を受けた。2月19日には最終的な掘削及び図面作成を終え、総ての調査を終了した。

第2節 調査の結果

基本層位（第37図）

当調査区の基本層位はアスファルトの下に約30cmの砂利層（整地土層）の下に淡黄色細砂層が約40cmの厚さで堆積しており、後述する第1面の整地土層を構成している。なお遺構面上で検出されたピットが非常に浅いことから、上面はかなり削平されたものと想定される。

その淡黄色系の造成土を除去した面で検出したのが第2面である。この面は区画溝である大溝（SD01）の検出面であり、大溝の最上面は黄灰色粗砂（1-2層：厚さ5cm）で被覆されていた。SD01の範囲外となる調査区西側には大溝検出面の基盤層となる灰色系砂層（3-1層）、その下層に黒色粘質土（3-2層）、灰色細砂（3-3層）の順で堆積していた。これらは土質は異なるが、堆積状況から他の土層とは明瞭に区別され、ほぼ一連の造成土と判断される。なかには黒灰色粘質土ブロックを含み、大溝を浚渫した際の土を引き上げたと思われる堆積も認められた。これら3層の時期は遺物がないため不明であるが、その直下の黒色系粘質土との関係から城下町形成期の造成土である可能性が高い。

3層の下層には、上から暗オリーブ灰色粘質土（4-1層）、オリーブ黒色粘質土（4-2層）が認められる。これらの土層は、松江城下町遺跡で一般的に認められる築城以前の堆積層であるオリーブ黒色系粘質土（通称チョコ層）によく似る層であり、築城以前の基盤層と考えられる。ただ、部分的に灰色細砂ブロックを含んでいることから、自然堆積ではなく水田耕作土など人为的な擾乱を受けた土層である可能性が高い。その下は基盤層である灰白色細砂層が堆積している。

①第1面

黄灰色粗砂造成土の上面に形成された遺構面である。上面のレベルは標高1.5m前後を測る。検出されたピットがかなり浅いことから上半部はかなり削平を受けていたと想定される。遺構面からは柵列（SA01）及びピット1基を検出した。

SA01（第34図） 調査区西側で検出した遺構で、ほぼ南北方向に列状をなして6基のピット（P1～P7）を検出した。ピットは径30～50cm、深さ12～25cm前後を測り、先述のとおり非常に浅い。

埋土は黄灰色系の砂質土が堆積していた。遺物は出土していない。遺構の性格については不明と言わざるを得ないが、後述するとおり、この遺構の下層にほぼ重複するように南北方向の区画状の遺構が複数存在することから、屋敷地の境界を示す区画的性格のものであった可能性が高い。

第1面は遺物が無く時期は不明であるが、検出面レベルや松江城下町遺跡の他の調査区の状況を勘案すれば、松平期以降に属するものと考えられる。

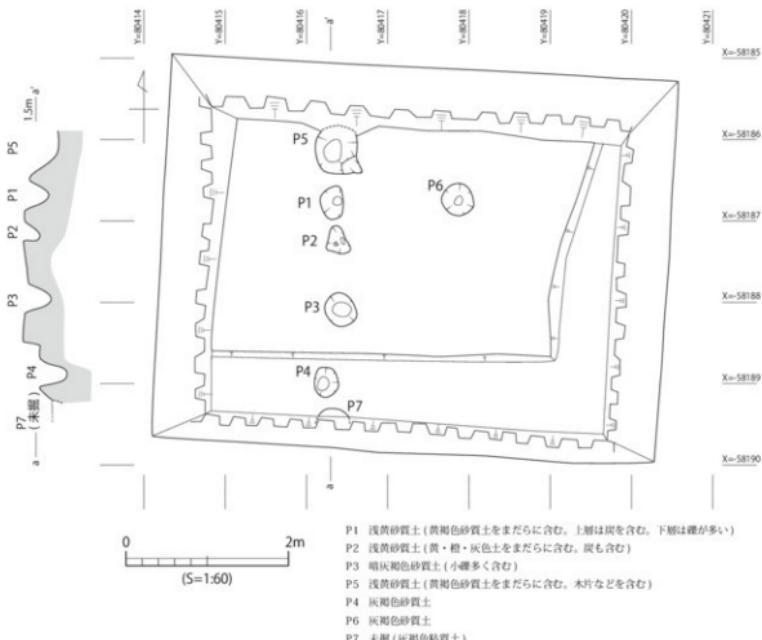
②第2面（第35図上）

1層を除去した面であり、先述のとおり大溝（SD01）を最終的に埋め立てた段階の面である。遺構面の標高は、ほぼ1.0m前後を測る。

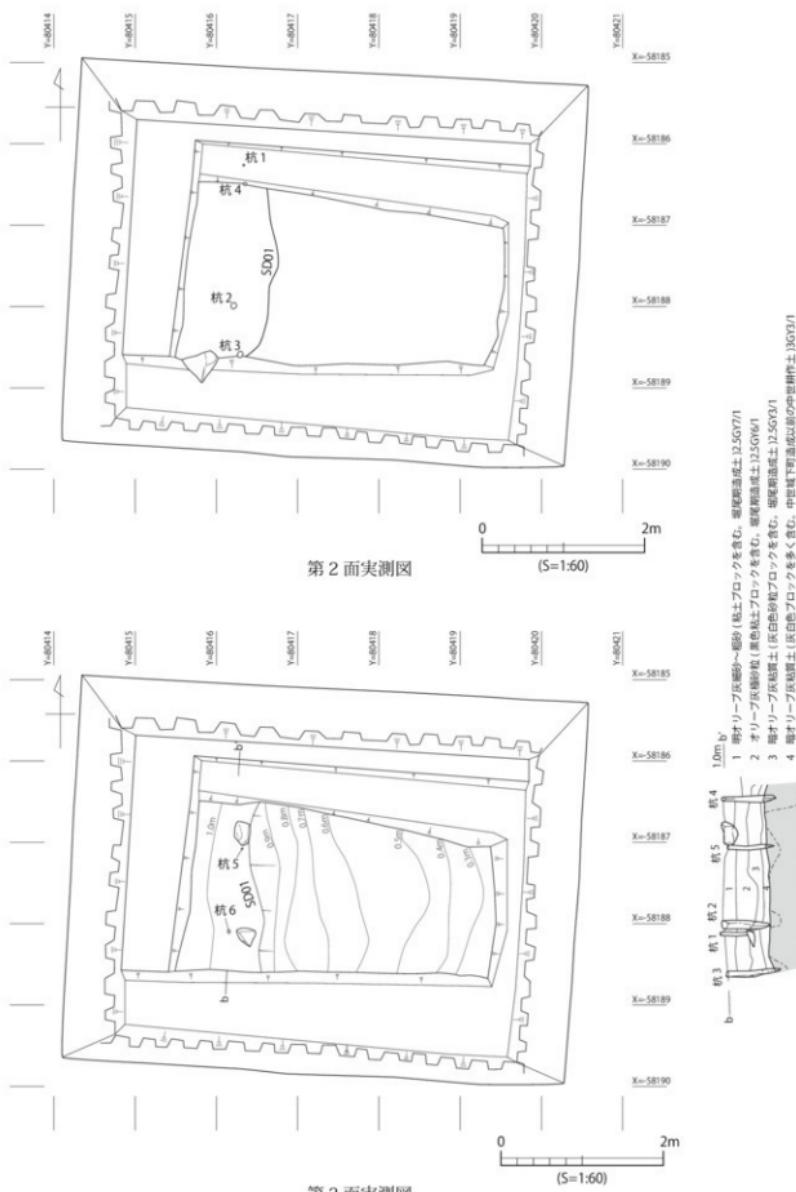
第2面で検出された遺構としては、第1面で検出したSA01のほぼ直下に杭列及び角礫1点が検出された。杭列はSD01の肩部の位置に沿うように南北の列をなしていた。その位置関係からやはり屋敷地の区画に関する遺構であった可能性が高い。なお、杭列の正確な打ち込み面は不明であるが、杭の上端は2層上面でとどまっていることから2面に伴うものとほぼ問題ないものと思われる。なお、調査区東側のSD01埋め立て後の部分では遺構は確認されていない。

③第3面（第35図下）

大溝（SD01）を再掘削した段階の遺構面であり、調査区西側は第2面から約10cm下がった遺構面である。SD01のほか、杭5、6や角礫を検出した。杭列及び角礫は第2面で検出した杭列とはほぼ同じ場所に南北に延びており、同一の地業に伴うものである可能性もある（第35図右土層図）。



第34図 松江城下町遺跡 第1面実測図



第35図 松江城下町遺跡 第2・3面実測図

④第4面（第37図）

大溝（SD01）当初掘削時の遺構面である。第37図には堀尾期の造成土を除去した調査最終段階の等高線を図示している。

SD01（第37図）

南北方向に走る大溝で、溝の西側肩部分から溝底面付近までの部分を検出した。溝の現状での規模は、幅3.7m以上、深さ1.1mを測る。溝はかなり緩い傾斜で、造成土である3層を盛った上面から掘り込まれている。なお、当遺構は溝ではなく大規模な土坑である可能性も否定できないが、他の面で検出された遺構との関係からここでは溝と考えておきたい。

溝内の埋土は上層と下層に大別され、上層は再掘削された後の埋土である。下層は玉砂利を含む灰色系の粗砂～細砂（2-4層・2-6層）が堆積していた。これらの土層は部分的に粘土を含みラミナを形成しないことから人為的な埋土の可能性がある。

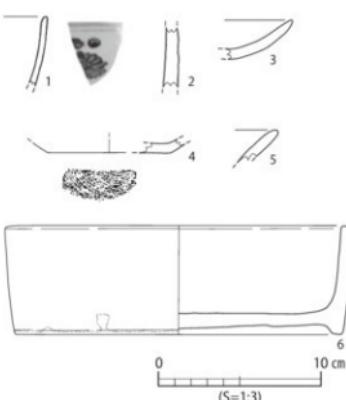
SD01上層は、上から黄色粘土層（2-1層）、灰色砂層（2-2層）、オリーブ色粘土層（2-3層）の順で堆積していた。このうち下層のオリーブ色粘土層は大量の薄板材及び木屑を大量に含んでおり、建物の屋根材等の廃材を一括投棄したものと考えられる。上層の黄色粘土層は松江城下町遺跡の比較的新しい段階の造成土としてよく見られる土層に類似する。

出土遺物（第36図）

遺物は陶磁器、土師質土器等が出土している。1は第1面を被覆する造成土中から出土した伊万里染付で17世紀前半に属するものである。2は第1面P1から出土した唐津の盤で、両面に釉薬が認められる。17世紀後半に属するものと思われる。3は土師質土器椀で1と同じく第1面上の造成土中からの出土である。浅い皿状の器形をなし、底部付近には指頭圧痕が認められ手捏ね成形と思われる。4も第1面造成土中から出土した土師質土器の底部で回転糸切痕を残す。5はSD01の最下層から出土した土師質土器环の口縁部片である。6は第1面上の造成土中から出土した幕末～明治期の布志名焼の水盤である。胎土が非常に精良であり御用窯系の製品と考えられる⁽¹⁾。

第3節 まとめ

当調査区においては、複数の時期の造成土を検出し、遺構としてはピット列、杭列（SA01）、大溝（SD01）を検出した。ピット列及び杭列は、いずれも調査区東側のはぼ同一平面位置で南北方向に検出され、その下層から検出された大溝西側肩部とほぼ一致している。本文中で述べたとおり、これらは屋敷地の区画的な機能をもつものと考えられ、城下町が造成された時から江戸時代後期に至るまでの長期間にわたり、数度の嵩上げが行われる中でもその平面的位置が長らく踏襲されていたものと判断される。



松江城下絵図においても、堀尾期から京極期を経て松平期に至るまで、調査箇所付近には南北方向の屋敷境界が認められる。絵図上では厳密には一致していないものの、発掘調査の結果からみて、同じ屋

第36図 松江城下町遺跡 出土遺物実測図

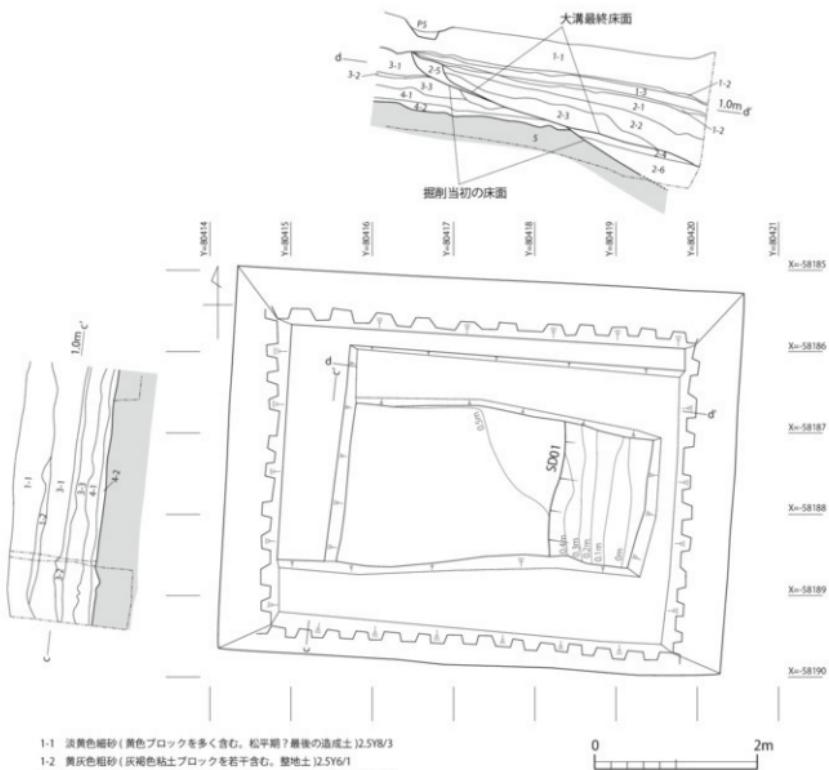
敷境界を表示したものであった可能性が高い。

このように、今回の調査は極めて狭小な範囲の調査であったにもかかわらず、松江城の内に隣接する城下町屋敷境を検出するなど、一定の成果を得ることができた。こうした地道な調査成果を積み上げることによって、今後松江城下町のより具体的な歴史像が結ばれることを期待したい。

(池淵俊一)

註

(1)出土品については阿部賛治氏にご教示いただいた。



第37図 松江城下町遺跡 第4面実測図

第6章 松江城三之丸発掘調査に伴う花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

島根県府耐震工事に伴う松江城三之丸発掘調査において、「大型石積み遺構」など江戸時代の遺構が発見された。また、松江城三之丸は、近年調査が進む松江城下町遺跡（県道城山北公園線）の延長線上に当たることもあり（図1）、松江城下町（広くは松江平野）の形成過程を明らかにするために、重要な地点の一つである。

本報では、第1調査区で発見された「大型石積み遺構」の用途、及び松江城築城以前の環境を推定するために実施した、花粉分析について報告する。

また、島根県教育委員会からは試料採取、本報告の執筆にあたり便宜を図って頂いた。紙面を借りて御礼申し上げます。

分析試料について

各調査区の平面図中に試料採取地点、断面図中に試料採取位置を示す（図2,3）。また、第2調査区No.5地点ではハンディジオスライサーによる柱状試料を採取しており、模式柱状図を作成して図5の花粉ダイアグラム中に示した。

分析方法

渡辺（2010）に従って行った。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミロン未満）に細分している。

分析結果

分析結果を図4、5の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本（針葉樹）花粉、木本（広葉樹）、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルを変えて示した。また左端の花粉総合ダイアグラムでは、区分ごとの累積百分率を示した。右端の含有量グラフでは、1g当たりの花粉と胞子の含有量を対数目盛りで示した。



図1 調査地の位置とトレーニングの配置

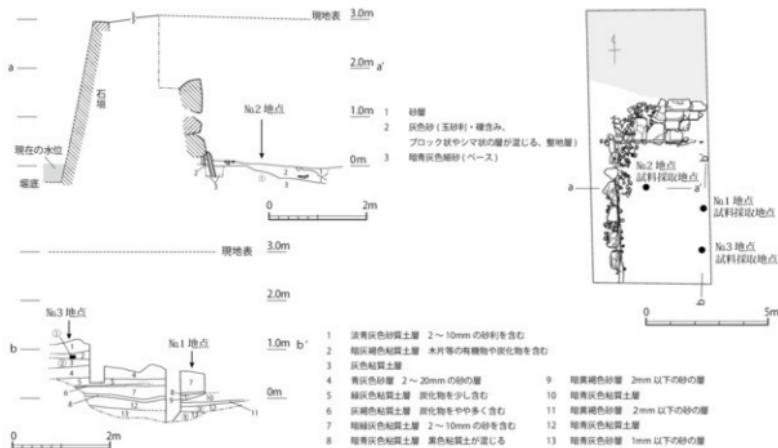


図2 第1調査区の試料採取位置

1	相間色粘質土(塊状)
2	暗灰褐色粘質土(塊状)
3	灰褐色粘質土(炭化木片含む)
4	暗褐色砂
5	灰褐色粘質土(黑色粘質土ブロック含む)
6	褐色色
7	暗灰褐色粘質土(褐色砂・黄色土ブロック含む)
8	灰褐色粘質土(白色土ブロック含む)
9	淡褐色粘質土(黄色土粒含む)
10	灰褐色粘質土(白色土ブロック含む)
11	暗灰褐色粘質土(木炭粒・黄色土ブロック含む)
12	黄白色粘質土(黄色土ブロック含む)
13	黄褐色粘質土
14	灰褐色粘質土(黒土・灰白色土ブロック含む)
15	褐色粘質土
16	黑色粘質土(小礫僅かに含む)
17	青灰色粘土

図3 第2調査区の資料採取位置

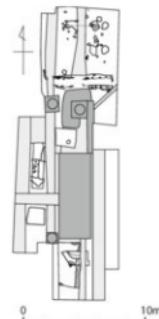
断面図はNo.4地点、No.5地点は図5の花粉ダイアグラム中に模式柱状図を示す。

花粉化石群集の特徴と、地域花粉帶との対比

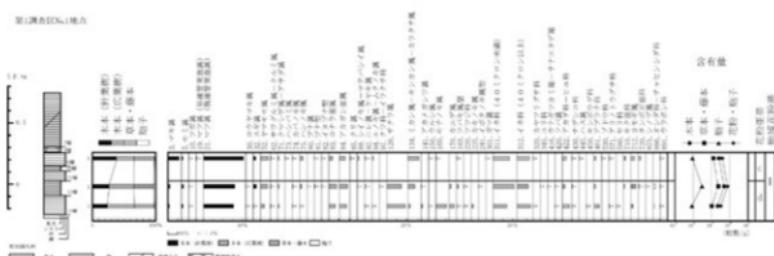
松江城下町遺跡では近年、景観復元や耕作層の確認を目的として、発掘調査に伴う花粉分析が実施され、資料が増加している。その成果は発掘調査報告書において公表されているほか、渡辺・瀬戸（2012、2013）などで地域花粉帶が設定され、地下断面図が作成されている。本報では、分析結果（花粉化石群集）を、この資料（地域花粉帶）と比較する。

(1) I 帯 (No.1 地点：試料No.1,2, No.3 地点：試料No.1～3, No.4 地点試料No.1,2)

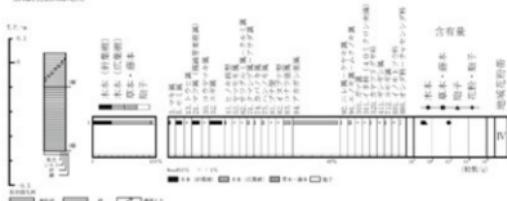
第1調査区の2地点では木本花粉の割合が70%程度を占め、草本花粉が20～30%、胞子が10%未満の割合で出現する。一方、第2調査区No.4地点では草本花粉の割合が70%を超え、木本



第1調査区No.1地点



第1調査区No.2地点



第1調査区No.3地点

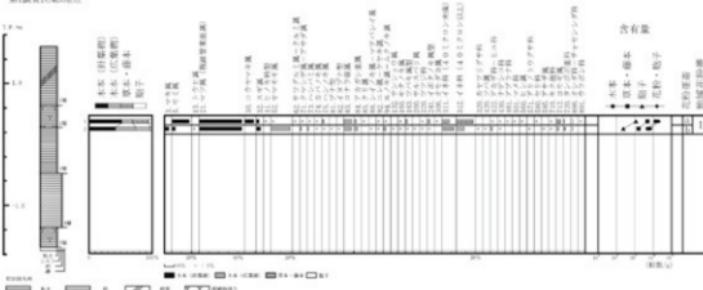


図4 第1調査区の花粉ダイアグラム

上：No.1地点 中：No.2地点 下：No.3地点

花粉の割合は20%程度に過ぎない。木本花粉の割合に差があるものの木本花粉の組成は、何れの試料でもマツ属（複管束亞属）が他の種類に比べ高率を示し、スギ属は低率である。これらの花粉化石群集の特徴は、渡辺・瀬戸（2013）のI帯の特徴と一致し、対比される。一方第1調査区の5試料には、それぞれ特徴的に検出される種類がある。第1調査区で最上位のNo.3地点試料No.1ではモミ属、コウヤマキ属といった針葉樹種が他の試料に比べ高率を示す、No.3地点試料No.2ではヤマモモ属高率を示し、低率であるがマキ属が特徴的に出現する。No.1地点試料No.2と3ではサクランボ属が高率を示し、更に試料No.3ではモチノキ属も高率を示す。またこれらの試料からは、低率であるが、ガマ属、ハス属などの抽水植物、ヒシ属、アザガ属などの浮葉植物由来の花粉が検出されている。また、前述の木本花粉の内、「虫媒花」のヤマモモ属、ミカン属・キンカン属・カラタチ属

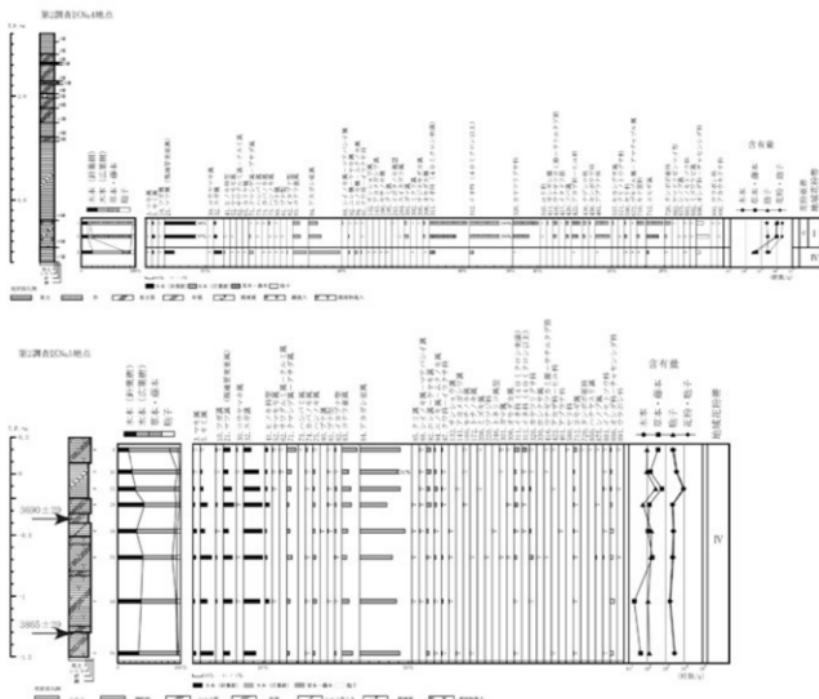


図5 第2調査区の花粉ダイアグラム

上：No.4地点 下：No.5地点

チ属、サクラ属、モチノキ属などは花粉の飛散距離が短く、調査地近辺で生育していたことが示唆される。前述のように第2調査区No.4地点の2試料では、草本花粉の割合が高く、特にイネ科(40ミクロン以上)が高率で検出される。このほか低率であるが、いわゆる「水田雑草」であるオモダカ属、イネ科(40ミクロン未満)、カヤツリグサ科、キカシグサ属、アカウキクサ属(小胞子囊)やミズワラビ属が検出される。

松江城下町遺跡でI帯は、松江城下町造成直前の植生を反映していると考えられている。このことは、第2調査区No.4地点試料No.1、2が三之丸造成直前の堆積物であることと整合する。一方、第1調査区で検出された「大型石積遺構」は、出土遺物や遺構の切り合いから、三之丸に伴う構築物であることが確かである。城下町遺跡内では堀尾期以降のデータに乏しかった事、中海・宍道湖地域の地域花粉帶では、近世から近代までマツ属(複維管束亞属)の高率出現が続くことから、I帯は三之丸造成直前(中世末)から近代までの広い時期の植生を反映していると考えられる。

(2) IV带 (No.2地点試料No.1、No.4地点試料No.3、No.5地点試料No.6～91)

木本花粉の割合が90%程度を占め、草本花粉、胞子はの割合で出現する。木本花粉ではアカ

ガシ亜属が他の種類に比べ高率を示し、スギ属がこれに次ぐ。更にマキ属を初めとする針葉樹種の割合が高い。これらの花粉化石群集の特徴は、渡辺・瀬戸（2014）のIV帯の特徴と一致し、対比される。

松江城下町遺跡ではIV帯とされた試料から縄文時代後期の14C年代が違えられており、今回の試料（No.5地点）からも $3,865 \pm 20$ (PLD-24745)、 $3,690 \pm 20$ (PLD-24744)の14C年代が得られた。

大型石積遺構について

「大型石積遺構」は、遺構内側からの出土遺物、遺構の検出状況から、三之丸に伴う近世の構築物であると考えられている。また、絵図などから三之丸内に造られた池に伴う構造物である可能性が高いと考えられている。

遺構内側の3地点内の、No.2地点（試料No.1）から得られた花粉化石群集はIV帯に対比され、縄文時代後期の植生を示していると考えられ、「大型石積遺構」の下位になる。一方、No.1、3地点の各試料が「大型石積遺構」を埋める堆植物であることは、前述のようにI帯に対比される花粉化石群集の特徴からも、明らかである。

検出された花粉化石のうち、遺構に隣接する三之丸内に生育していた可能性が高い種類は、木本花粉ではヤマモモ属、ミカン属・キンカン属・カラタチ属、サクランボ属、モチノキ属などである。これらの母植物である樹木が三之丸庭園内の「大型石積遺構」の近くに植栽されていたと考えられる。初期（d亜帯の時期）には、サクランボ類、ソヨゴあるいはクロガネモチなど（モチノキ類）、更にヤマモモ、ミカン類、カエデ類、ツバキ類、ツツジ類、カキなどの樹木が植えられていた。また「池」には、沈水植物のフサモ類（アリノトウグサ科）が生育していた。沈水植物が生育することから、「池」の深部では水深1.5m程はあった可能性がある。その後小規模な改修が行われ、モチノキ類が見られなくなり、ヤマモモ、ミカン類が増加する。c亜帯の時期になるとサクランボ属が検出されなくなり、ヤマモモ属、ミカン属・キンカン属・カラタチ属の出現率が高くなる。またマキ属の出現率も高くなる。三之丸庭園が改修され、やや暖かい地域を好む、ヤマモモ、ミカン類やイヌマキやナギなどの樹種を多用するようになった可能性がある。また、「池」にはガマ類やハス類などの抽水植物が植栽され、やや艶やかになった。引き続き沈水植物も検出されることから、「池」には沈水植物の生育するやや深い場所や、抽水植物の生育する浅瀬もあったことが分かる。b亜帯の時期になるとヤマモモ属が高率になり、マキ属、ミカン属・キンカン属・カラタチ属が減少する。また、外来種であるサルスベリ属が検出される。三之丸庭園が再度改修され、イヌマキ（あるいはナギ）は残るもの、ミカン類の多くは間引かれ、ヤマモモが多くなった。一方で外来種のサルスベリが植栽された。また、「池」から艶やかな抽水植物が姿を消し、浮葉植物であるアザガヤ可憐な花を咲かせていた。抽水植物が見られなくなったことから、改修に伴い浅瀬が無くなり、全体に1m程度の水深があつたとも考えられる。a亜帯の時期に入るとヤマモモ属が急減し、ツバキ属型、イボタノキ属型の広葉樹種の外、モミ属、コウヤマキ属の針葉樹種が増加する。ツバキ類やネズミモチ（イボタノキ属）は生け垣に用いられることがあるから、「池」の周囲を囲む生け垣に、これらの樹種が用いられたかもしれない。一方、モミ属、コウヤマキ属は花粉生産量も多く、亀田山（本丸・二之丸）から飛来した可能性もある。しかし、通常これらの種類がここまで高率になることは少なく、三之丸

内の比較的近い場所に植栽された可能性がある。また、「池」ではヒシ類やオモダカ類が可憐な花を咲かせていた可能性がある。抽水植物（オモダカ類）が復活することから、浅瀬が復活した可能性が指摘できる。

古環境復元

得られた花粉化石群集に基づき、三之丸周辺の古植生を推定する。

(1) 繩文時代後期（IV带）

木本花粉の割合が極めて高く、草本花粉、胞子の割合が低い。この様な花粉化石群集は、林床の堆積物、あるいは岸辺からやや離れた湖沼の堆積物から得られる。一方、No.2地点、No.5地点の分析試料は腐植質で細粒の水成堆積物であり、岸辺からやや離れた湖沼の堆積物と考えられる。試料採取地点が水域であったことから、最も近い陸地は亀田山であり、調査地に面した亀田山の南側斜面から、検出された木本花粉の多くがもたらされたと考えられる。一方IV帶は亀田山東部に広がる松江城下町遺跡東部でも広く認められることから、亀田山南斜面と似た植生で、松江平野周囲の丘陵が覆われていたと考えられる。

したがって、亀田山の南側斜面や広く松江平野周囲の丘陵は、高率で検出されるアカガシ亜属花粉の母植物であるカシ類を主体とする「照葉樹林」で覆われていたと考えられる。一方、スギ属を初めとする針葉樹種の花粉も多く検出され、「照葉樹林」に混淆していた可能性が指摘できる。ただしスギは温潤環境を好むことから、谷沿いや低地にスギ林を成していた可能性も指摘できる。また、生育が早く二次林（遷移林）を構成するクマシデ属・アサダ属やコナラ亜属花粉の出現率もこれらに次ぐことから、シデ類やナラ類を主要素とする二次林の広がりも推定できる。

一方岸辺近くの湿地には、ガマ類、オモダカ類、ヨシなどのイネ科植物、カヤツリグサ類などが生育し、湖岸にはススキなどのイネ科植物やタンポポ類などが生育していたと考えられる。

(2) 三之丸造成直前（中世末）から近代（I帶）

①中世末の調査地近辺

第2調査区試料No.1、2ではイネ科(40ミロン以上)が高率で検出され、「水田雜草」であるオモダカ属、イネ科(40ミロン未満)、カヤツリグサ科、キカシグサ属、アカウキクサ属（小胞子囊）やミズワラビ属が検出される。このことから、調査地点で水田耕作が行われていたものと考えられる。松江城下町遺跡の分析結果でも、堀尾期の造成直前の層準で水田跡が検出されており（渡辺、印刷中）、広範に水田が広がっていたと広がっていたと考えられる。更に栽培植物由来のソバ属も検出され、調査地点では裏作や畦畔を利用してソバが栽培されていた可能性も指摘できる。

②三之丸時代の調査地近辺

前述のように三之丸庭園内には、サクラ類、ヤマモモ、モチノキ類、ミカン類、カエデ類、ツバキ類が植えられており、何度かの改修に伴い植え替えられていた可能性がある。また、遺構内部の水域には、花粉化石が検出されたガマ類、ハス類などの抽水植物や、ヒシ類、アサザ類などの浮葉植物が生育していた。花粉帯によって検出できる水生植物の種類が変わることから、庭の改修に伴い「池」の形や深さにも変化があった可能性がある。

③亀田山（本丸・二之丸）から周辺の丘陵

マツ属（複雑管束亜属）が高率を示し、クマシデ属・アサダ属やコナラ亜属も検出され、亀田山（本

丸・二之丸)や松江平野周囲の丘陵ではアカマツやシデ類、ナラ類を要素とする里山(二次林、遷移林)が広がっていたと考えられる。ただし、亀田山(本丸・二之丸)には、現在見られるようなクロマツがすでに植栽されていた可能性も指摘できる。また、亀田山西部の堀川沿いには、その規模は分からぬもののハンノキ林が分布していた可能性がある。また、低率であるがアカガシ亜属も検出され、スギ属やヒノキ属などの針葉樹種も検出される。これらは、亀田山(本丸・二之丸)や松江平野周囲の丘陵、あるいは谷筋で小規模な林を形成していたと考えられるほか、北山山地や南方の中国山地に分布していたものが飛来した可能性もある。

まとめ

松江城三之丸発掘調査に伴って、花粉分析を実施した結果、以下の事柄が明らかになった。

1. 花粉分析の結果、統計処理に十分な量の花粉化石が検出できた。得られた花粉化石群集と近年発掘調査の進む松江城下町遺跡で局地花粉帶と比較、対比した結果、I帯とIV帯に対比できた。
2. 松江城下町遺跡でI帯は、松江城下町造成直前の植生を反映していると考えられていた。今回の分析によって、I帯の花粉化石群集が江戸時代の間も続くことが明らかになった。さらに、中海・宍道湖地域の地域花粉帶との比較から、更に近代まで続く可能性が指摘できた。
3. 「大型石積遺構」内側から得られたI帯の花粉化石群集の変遷から、三之丸庭園内の植栽の変遷を推定した。初期にはサクラ類、ソヨゴ(あるいはクロガネモチ)、ヤマモモ、ミカン類、カエデ類、ツバキ類、ツツジ類、カキなどの樹木が植えられ、「池」にはフサモ類が生育していた。その後小規模な改修が行われ、モチノキ類が見られなくなった。最初の改修によって、ヤマモモ、ミカン類やイヌマキ(あるいはナギ)などの樹種を多用するようになり、「池」ではガマ類やハス類が植栽された。次の改修ではヤマモモが多くなり、外来種のサルスベリが植栽された。また、「池」にはアザサが植栽された。最後の改修ではツバキ類やネズミモチ(イボタノキ属)が生け垣に用いられ、モミ属、コウヤマキ属も植栽された。また、「池」ではヒシ類やオモダカ類が植栽された。
4. 三之丸が造成される以前には、調査地一帯に水田が広がっていた。
5. 時期毎に亀田山から松江平野周辺の丘陵にかけての古植生を推定した。IV帯の時期(縄文時代後期)にはこれらの地域はカシ類を主体とする「照葉樹林」で覆われており、スギ属を初めとする針葉樹種が混生していた。ただしスギは谷沿いや低地にスギ林を成していた可能性もある。また、シデ類やナラ類を主要素とする二次林も広がっていた。岸辺近くの湿地には、ガマ類、オモダカ類、ヨシなどのイネ科植物、カヤツリグサ類などが生育し、湖岸にはスキなどのイネ科植物やタンポポ類などが生育していた。I帯の時期(中世末～近代)には亀田山(本丸・二之丸)や松江平野周囲の丘陵ではアカマツやシデ類、ナラ類を要素とする里山(二次林、遷移林)が広がっていた。ただし、本丸にはクロマツが植栽されていた可能性もある。照葉樹林やスギ林は亀田山(本丸・二之丸)や松江平野周囲の丘陵、あるいは谷筋で小規模な林を形成していたと考えられるほか、北山山地や南方の中国山地に分布していた。

参考文献

- 中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二（2012）松江平野の古環境(1)-県道大手前線発掘調査に連して(1)-、松江城研究, 1, 49-59, 松江市教育委員会、島根.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二（2013）松江平野の古環境(2)-県道城山北公園線(大手前通り) 線発掘調査に連して(2)-、松江城研究, 2, 35-44, 松江市教育委員会、島根.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二（2014）松江平野の古環境(3)-県道城山北公園線(大手前通り) 線発掘調査に連して(3)-、松江市歴史叢書, 7(松江市史研究, 5), 87-93, 松江市教育委員会、島根.
- 渡辺正巳（白刷中）松江城下町遺跡（母衣町180、殿町198-2外）発掘調査に伴う自然科学分析、城山北公園線都市計画 街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書、3, 3, 松江市教育委員会・(公財)松江市スポーツ振興財団、島根.

第7章 総括

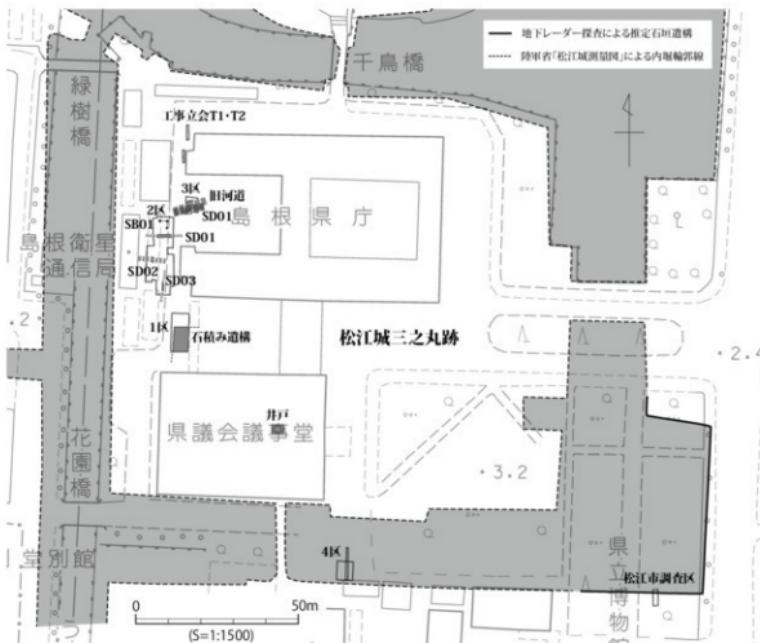
松江城三之丸は、松江藩主の日常生活の場や政務の場として使用され、御殿が建ち並んでいた。しかしながら、これまで小規模な工事立会や試掘調査を除けば発掘調査は行われておらず、三之丸の構造について考古学的に言及できるような資料は得られていなかった。また、三之丸跡には地上6階、地下2階の島根県庁舎が建っており、遺構の大部分が失われていると考えられていた。

しかし、今般の島根県庁改修工事に伴う一連の発掘調査によって、大型石組み遺構や礎石建物、溝など遺構が予想以上に残っており、考古学的な検討ができる資料が得られた。以下に今回の調査成果をまとめてみたい。

1. 松江城三之丸における築城の過程

三之丸跡の基本層序は下から、自然堆積層—築城以前の旧表土—築城初期の造成土—第2段階の造成土—第3段階以降の近世造成土—近代の造成・搅乱土となっている⁽¹⁾。こうした土層の状況などをもとに、築城前の環境や造成の過程について述べたい。

築城以前の旧表土層は2・3区で確認されている。いずれにおいても土壤分解が進んだ黒色粘質土で、巻き込みブロックも見られることから、耕作土であったと考えられる。なお、3区では旧表土下層の自然堆積層（灰色系シルト層）を切り込んで水路もしくは自然流路が南西—北東方向にのびており、さらに旧表土面でも旧河道と重複して南西—北東方向の大溝（3区SD01）が存在する。



第38図 松江城三之丸跡 遺構配置図

3区 SD01は、築城初期の造成土で埋め戻されており、前出の水路もしくは自然流路を掘りなおして造られた築城以前の水路であるか、それとも築城時に掘削され短期間に埋め戻されたのか、2通りの解釈ができる。旧表土上面の標高は、2区で0.8m、3区では1.3mとなっており、両者はさほど離れていないにも関わらず、高低差が大きい。3区 SD01の両側が土手のように高くなっている可能性も考えられる。なお、1区では黒色の旧表土は見られず、自然堆積層（灰色系シルト層）の上に旧河道による堆積が東に向かって傾斜するかたちで確認されている。

以上のことから、築城前の三之丸跡周辺は耕作地として利用され、この中を自然流路あるいは水路が通っていたと考えられる。

初期造成土は、旧表土層（黒色土）と下層の自然堆積層（灰色系シルト）の混和土で、築城時（堀尾期）の堀の掘削土と考えられる。2区では旧表土上に厚さ60cmほど盛られ、標高約1.6mまで整地されているのに対し、3区では前述のSD01を埋めるのみで大幅な嵩上げは見られない。この面で検出された遺構は、2区 SK03があるが、性格は不明で、三之丸御殿の存在を示すようなものは今のところ確認されていない。

第2段階の造成土は黄色～灰色系の山土が用いられており、松江城の北側にある赤山を削って搬入されたものと考えられる。2・3区とも標高約1.7m前後まで嵩上げされている。松江城下町遺跡殿町279番地（南屋敷）では、京極期にあたる第3遺構面は山土で造成されていることから、三之丸においても京極期の造成を想定している。ただし、この面から掘りこまれた2区 SD03で胎土目のある肥前系陶器皿が出土していることから、17世紀初頭頃、堀尾氏による築城期までさかのぼる可能性も考えられる。この遺構面で掘削された遺構は、ほかに2区の石組み溝（SD01）がある。区画もしくは排水施設とみられるもので、御殿の存在を示唆している。

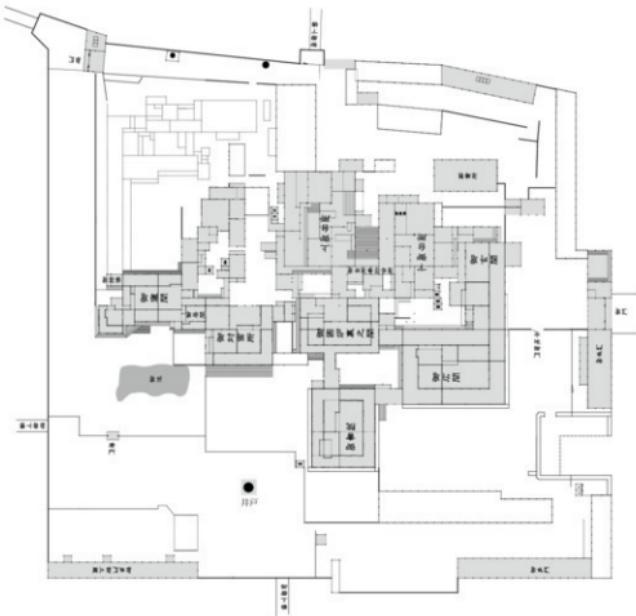
第3段階以降の造成土は、地点ごとに様相が異なっており、また攪乱等により土層が分断されているため、土層の対応関係は十分把握できなかった。松平期のものと考えられ、2区の遺構検出状況から少なくとも3回以上の造成が行われたと考えられる。2区の礎石建物跡（SB01）、1区の石積み遺構は、大きく見てこの段階に造られた遺構であり、出土遺物から17世紀末頃に位置付けられる。

以上のように三之丸では築城後も度重なる造成が行われていることが明らかになった。江戸時代には松江が大雨や河川の氾濫によって幾度も洪水にあってることが文献から窺われ、水害に対処するために土地の嵩上げがなされたものと考えられる。

2. 松江城三之丸跡の遺構の性格と空間構造

今回の調査では、礎石建物跡、石積み遺構などが検出された。これらについて近世城絵図（第39・40図）^②との比較をしながら、その性格や構造について検討したい。

礎石建物跡 2区では、1区の石積み遺構から北へ約32mの地点で礎石建物跡（SB01）が検出された。遺構面で出土した遺物から17世紀末頃のものと考えられる。建物跡のごく一部のみを検出したものであるため、全体の規模・平面形は不明であるが、東西・南北でそれぞれ1間（1.8m）分が確認されている。どこまで厳密な対比ができるか問題もあるが、ほぼ同時期の絵図①を見れば、SB01の位置は、三之丸御殿の「御寝間」の北側にあたる。三之丸の北西には藩主の家族や奥女士が居住した奥向きの空間があったと考えられており、SB01は藩主の私的な空間と奥向きの空間とをつなぐ廊下の一部であった可能性がある。



① 17世紀後半の三之丸



② 1720年頃の三之丸

※和田 2014 より引用

第39図 絵図からみた松江城三之丸の変遷(1)

第7章 総括



③ 弘化年間の三之丸



④ 安政 3 年頃の三之丸

※和田 2014 より引用

第40図 絵図からみた松江城三之丸の変遷(2)

石積み遺構 1区の調査では、南北 5.7m 以上、東西 3.6m 以上、高さ 1.7m 以上の大型の石積み遺構を検出した。遺構の時期は特定しがたいが、北側裏込めの清掃中に出土した染付碗が上層からの混入でないとすれば 17世紀末以降に構築され、埋土上層の出土遺物から明治期には埋め戻されたと考えられる。土層堆積状況から、内部に水を湛えていたと推測される。

城絵図と比較してみると、絵図①・②では、三之丸の西より、南北では中央の位置に「御寝所」、「御居間」があり、そこからやや南側に「御池」が描かれている。本遺構はその位置から、この「御池」に相当するものとみて矛盾しない。絵図の「御池」は曲線的な輪郭で描かれており、隅が直角になる本遺構とは形状が異なるが、これについては、「御池」の下部構造のみが残存し、上部は後世に掘削を受けて原形が失われた可能性が想定できる。なお、絵図①では、「御池」が方形の水色の貼紙の上に輪郭線が描かれており、貼紙そのものが当初の池の形状を示しているのであれば、検出遺構と整合する。

弘化年間（1844～1848）の絵図③、安政3（1856）年の絵図④には「御池」ではなく、④に至っては「御池」のあった部分に石畳道のようなものが描かれており、絵図から見れば幕末頃には「御池」は存在していないようみえる。ただし、石積み遺構の埋土上層出土から明治期の遺物が出土しているため、絵図に描かれていないだけで、何らかの手を加えられながらも「御池」は存在したか、少なくとも埋まり切ってはいなかったのではないかだろうか。

花粉分析では、石積み遺構内や周辺の植生が時期を追って変遷していることから、庭園や池の改修とともに植栽が植え替えられたと推測されている^⑤。こうした点からも、長期間にわたり池が存在したことが窺われる。

内堀 三之丸の南側及び東辺南側の内堀は、昭和24（1949）年に埋められて、現況では観察できない。内堀の南東側については、松江市の道路拡幅計画に伴って実施された地下レーダー探査や松平直政公銅像復元事業に伴い松江市教育委員会によって行われた試掘調査^⑥によってその範囲が推測できる。今回の第3次調査では、三之丸の南側中央を発掘したが、調査区内では堀石垣は確認できず、堀の広がりについては明らかにできなかった。第38図の内堀範囲は、明治期に陸軍省によって作成された「松江城測量図」^⑦の内堀南東側の輪郭線と試掘調査・地下レーダー探査による内堀石垣の推定線を合成して復元したものである。

その他 今回の発掘調査と直接かかわるものではないが、総務部營繕課の職員より県議会議事堂内の地下室に古い井戸が現存するとの情報提供があった。絵図①・④ではまさに同じ位置に井戸が記されており、さらに正保年間（1644～1648）の「出雲国松江城絵図」^⑧にも見られる。このことから議事堂内の井戸は、17世紀中頃以前にさかのぼるものと推測される。

3. 松江城下町遺跡（殿町 128）の近世屋敷境遺構

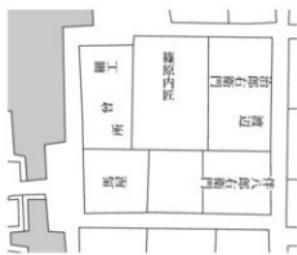
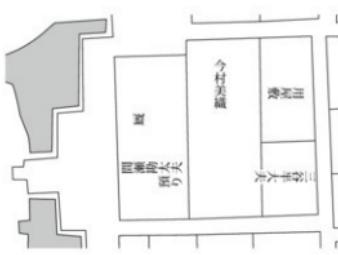
松江城下町遺跡（殿町 128）は、三之丸表門外にある勢溜に西面した区画内にあり、調査地点は区画の中央からやや南寄りに位置する。4面の遺構面で、南北方向の大溝や杭列・柵列が確認され、これらは近世の屋敷境遺構と考えられる。絵図との比較からその位置付けを試みてみたい。

第41図の城下町絵図^⑨を見ると、この区画は北西隅が鍵形に切り取られた方形を呈し、北辺中央の鍵形に曲がる部分で東西にのびる道と南北にのびる道が交わっている。区画内は、4～6の屋敷に区分されており、西側の屋敷地は北辺の鍵形から南側に延長した線を東限としている。絵図①・②では南西隅の屋敷地が「馬屋」と記されており、絵図③～⑤では鍵形より西全体が「厩」「御厩」

となっている。本調査区で検出された大溝などの屋敷境遺構は、北辺の鍵形から北側へのびる道の延長上に位置しているから、各時期を通じて松江藩の厩舎と東隣の屋敷地とを区画するものであったと考えられる。



現在の城下町遺跡（殿町 128）周辺

①堀尾期松江城下町絵図
元和 6 年～寛永 10 年 (1620 ～ 1633)②寛永年間松江城下敷町之図
寛永 11 ～ 14 年 (1634 ～ 1637)③松江城下町絵図
元文～延享年間 (1736 ～ 1748)④雲州松江御城下之図
文政 8 ～ 天保 2 年 (1825 ～ 1831)⑤松江城下図
安政～文久年間 (1854 ～ 1863)

第 41 図 松江城下町遺跡（殿町 128）周辺地形図及び城下町絵図

今回の調査は島根県庁改修工事に伴うものであるため、調査範囲はごく限定的なものであったが、松江城三之丸の築造過程や、三之丸御殿とそれに伴う庭園（池）について新たな知見を得ることができた。しかしながら、一方で調査区が狭かったことや、攪乱などにより遺構面が分断されていたことにより、遺構面の判定や対応関係、時期については十分把握できておらず、今後の課題として残されている。今後、さらなる調査・検証によって、松江城及び城下町の研究が深められることを期待したい。

(東山信治)

註

- (1) 平成24年5月の松江城下町遺跡検討会で、城下町遺跡の土層解釈基準が示されているが、三之丸跡の土層も概ね城下町遺跡と共通している。ただし、松江城下町遺跡では第2段階以降の近世造成土は調査地点によって異なっており、共通層となるものは今のところ見出されていない。
- (2) 和田嘉有 2014『三之丸の特色とその推移について』『松江市歴史叢書』7
なお第39・40図に掲載した図は、この論文より引用・一部加筆したもので、原図は下記のとおりである。
 ①「御三丸御指図 三枚之内」（国文学研究資料館所蔵）、②「御城内絵図」（国文学研究資料館所蔵）、
 ③「三ノ丸御間取図」（松江歴史資料館所蔵）、④「安政三辰四月改 三丸惣図面」（国文学研究資料館所蔵）
- (3) 第6章参照
- (4) 松江市教育委員会 2007『松平直政公銅像復元事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (5) 松江市 1992『史跡松江城石垣調査報告書』所収（国立国会図書館蔵）
なお、本測量図と地下レーダー探査の石垣推定線は内堀南側では合致しなかったため、第38図では地下レーダー探査の石垣推定線にあわせて内堀南側の外郭線を修正している。
- (6) 松江市 2014『松江市史 史料編11 絵図・地図』図24（国立公文書館蔵）
- (7) この図に使用した絵図の所蔵機関は下記のとおりである。
 ①島根大学附属図書館蔵、②丸亀市立資料館蔵、③島根県立図書館蔵、④島根県立図書館蔵、⑤絲原記念館蔵
絵図の翻刻については、松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課史料編纂室より御教示を得た。

第1表 松江城三之丸跡出土遺物観察表

掲番 写真 番号	調査区	出土遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調
					(cm) 長	(cm) 幅	(cm) 厚			
9-1 35	1区	石積遺構北側	肥前系磁器	碗						
9-2 35	1区	SK01	陶器	甕?		(10.1)		精良(細砂粒含む)		
9-4 35	1区	石積遺構西側	瓦	軒丸瓦					良	
9-5 35	1区	近代造成土	瓦	軒丸瓦					やや不良	
9-6 35	1区	石積遺構埋土	瓦	軒丸瓦					良	
		上層								
9-7 35	1区	石積遺構埋土	瓦	軒丸瓦				密	良好	黒~灰白色
		上層								
9-8 35	1区	石積遺構埋土	瓦	軒丸瓦				2mm大の砂粒含む	良好	黒~灰白色
		上層								
9-9 35	1区	石積遺構埋土	瓦	軒丸瓦		(12.4)	(5.9)	2mm以下の砂粒含む	良好	
		上層								
9-10 36	1区	石積遺構埋土	瓦	軒丸瓦				2mm以下の砂礫・砂粒含む	良好	黒灰色
		上層								
9-11 36	1区	石積遺構埋土	瓦	丸瓦				2mm以下の砂礫含む	良好	黒色
		上層								
9-12 36	1区		瓦	丸瓦			7.1	1mm以下の砂粒含む	良好	灰色
9-13 36	1区	石積遺構北側	瓦	丸瓦					良	
9-14 37	1区	石積遺構埋土	瓦	平瓦 or 棟瓦				1mm以下の長石・石英含む	良好	
		上層								
9-15 37	1区	石積遺構埋土	瓦	棟瓦 袖 瓦(左端)				密	良好	黒色
		上層								
9-16 37	1区	近代造成土	瓦	軒棟瓦				2mm以下の砂礫・砂粒含む	良	黒色、瓦当は明黄色
10-1 38	1区	石積遺構埋土	瓦	道具瓦				密	良好	黒~灰白色
		上層								
10-2 37	1区	石積遺構埋土	瓦	埴				密	良好	黒色~暗灰白色
10-3 38	1区	SD01	瓦	道具瓦				密	良好	灰白色
10-4 38	1区	石積遺構北側	瓦	道具瓦	23.0	5.2	2.0	1mm以下の長石粒を含む	良好	
15-1 39	2区	SBO1	白磁	椀	(8.4)		1.8~	密	良好	
15-2 39	2区	SBO1	土師質土器	灯明皿	12.3	4.5	2.8	密	普通	灰白色
15-3 39	2区	近世造成土	土師質土器	皿	(14.0)		2.1~	密	良好	淡褐色
15-4 39	2区	近世造成土	土師質土器	皿	(13.0)		3.3~	密	普通	灰白色~黒色
17-1 39	2区	SD01	瓦	丸瓦				5mm大黒色粒子含む	良好	灰褐色
17-2 39	2区	SD01	瓦	丸瓦				2mm下の砂粒含む	やや不良	淡褐色~灰褐色
17-3 40	2区	SD01	瓦	丸瓦		15.4	8.0	3mm以下の赤色粘や砂粒含む	やや不良	黒色
17-4 40	2区	SD01	瓦	平瓦	27.9		2.0	2mm以下の砂礫含む	良好	黒灰色
17-5 40	2区	SD01	瓦	平瓦				1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰色
17-6 40	2区	SD01	瓦	平瓦				2mm以下の砂粒を多く含む	やや不良	オリーブ黒色
17-7 40	2区	SD01	瓦	平瓦				1mm以下の砂粒を多く含む	良好	オリーブ黒色
20-1 41	2区	SD03	唐津	胎土目皿	10.8	4.6	3.0	密	良好	暗褐色~褐色(輪)黄緑色
20-2 41	2区	SD03	土師質土器	皿	13.0	(6.0)	2.5	密	普通	灰白色
21-1 41	2区		肥前	皿	10.2	5.8	2.8	密	良好	白色
21-2 41	2区		肥前	八角鉢	(8.4)	2.3~	密		良好	白色(地)

挿図番号	写真番号	調査区	出土遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調
						(cm) 長	(cm) 幅	(cm) 厚			
21-5	41	2区		瓦	いぶし瓦 破風のケラバ				密	良好	黒色～灰白色
21-6	41	2区		瓦	平瓦				2mm大の砂粒含む	不良	灰白色
28	42	3区	地上直上	土師質土器	杯			2.6～	1mm以下の砂粒を少し含む赤い粒？混じる	良好	外：にぶい黄色 内：にぶい黄橙色

第2表 土鍾観察表

挿図番号	写真番号	調査区	出土遺構名	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調
21-3	41	2区	南側旧表土	土製品	土鍾	3.0		径：1.4	0.5	4.7	密	良好 淡褐色
21-4	41	2区	土層グリッド 16層	土製品	土鍾	2.9		径：0.7	0.2	1.4	密	良好 褐色

第3表 木製品観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	調査区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
9-3	35	木製品	漆器椀	1区	石積遺構埋土	口径：11.6			外：黒漆 丸に二重の松の紋 内：赤漆		
10-5	37	木製品	箸状木製品	1区	石積遺構埋土	19.3	0.7	0.6	断面が多角形に面取りされた棒状の製品		
10-6	37	木製品	加工材	1区	石積遺構埋土	(20.4)	2.8	1.8	両端がほどぞ状に突き出し一方には側面にえぐりが入る。もう一方は先端が欠損し元の形状不明		
17-8	40	木製品	板状木製品	2区	SD01	(25.2)	(6.2)	1.1	木取り 板目か 上面に斜格子の線刻入る		

第4表 瓦分類別重量表（単位：g）

調査区	出土位置	丸瓦	軒丸瓦	平瓦	桟瓦	軒桟瓦	道具瓦・埴ほか
1区	SK01				134	343	
	その他	8635	3676	11700	6719		3972
2区	SK01	219		837			
	SD01	2108		14918			
	SD02			2200			
	その他	359		6043			
4区		561		1373			

第5表 松江城下町遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土遺構名	種別	器種	口径(cm) 長	底径(cm) 幅	器高(cm) 厚	胎土	焼成	色調
36-1	42		伊万里	椀			4.3～	密非常に細かな黒っぽい砂粒を少し含む	良好	外：内 明緑灰色
36-2	42	第1面PI	唐津	盤			3.7～	1mm以下の砂粒を少し含む黒色の粒まじる	良好	外：内 灰白色
36-3	42		土師質土器	杯			2.4～	密1mm以下の砂粒を若干含む	良好	
36-4	42		土師質土器	杯	(7.6)	0.8～	密3mm以下の砂粒を多く含む	良好	外：内 浅黄色	
36-5	42	SD01最下層	土師質土器	杯			2.2～	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	外：内 灰白色
36-6	42		布志名	水盤	20.6	20.0	6.7	精良		外：緑色釉 外底：露胎 内：透明の釉

写真図版



1区 全景(南東から)



1区 上層遺構(西から)



1区 西壁土層断面

图版 2



1区 SD01



1区 SO1



1区 SK01



1区 石積み遺構(南東から)



1区 石積み遺構(東から)



1区 石積み遺構 (北東から)



1区 石積み遺構北壁



1区 石積み遺構北西隅



1区 石積み遺構西壁



1区 石積み遺構階段
(真上から)



1区 石積み遺構階段
(南東から)



1区 石積み遺構
胴木・杭



1区 石積み遺構
樹木・杭



1区 石積み遺構内側
疊敷検出



1区 石積み遺構北側土層



2区 北半部全景(北から)



2区 土層確認グリッド(東から)



2区 SB01(北東から)



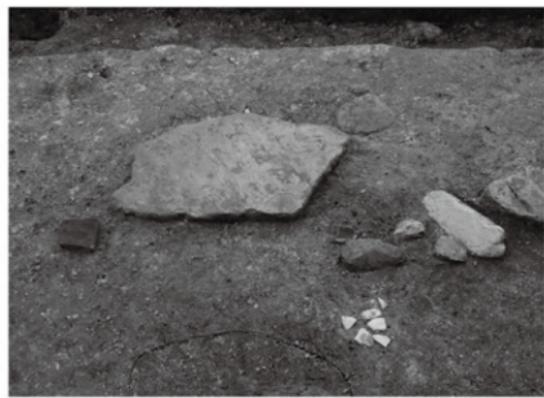
2区 SB01(北西から)



2区 SB01・SS01 断面
(東から)



2区 SB01・SS02
(東から)



2区 SB01・SS03
(東から)



2区 SD01(東から)



2区 SD01 土層
(西から)

图版 12



2区 SD01(北西から)



2区 SD01(北から)



2区 SD01 挖形(東から)



2区 SS05(南東から)



2区 S01(南から)



2区 S02(南から)



2区 SS06(北から)



2区 SS06 横 b-b' 土層
(西から)



2区 SD02 検出状況
(東から)



2区 SD02(東から)



2区 SD02(北東から)



2区 SD02 瓦出土状況
(東から)



2区 SS06-a' 土層
(南西から)



2区 SS06・SD03b-b' 土層
(南から)



2区 SS06(南西から)



2区 SK02 検出状況
(北から)



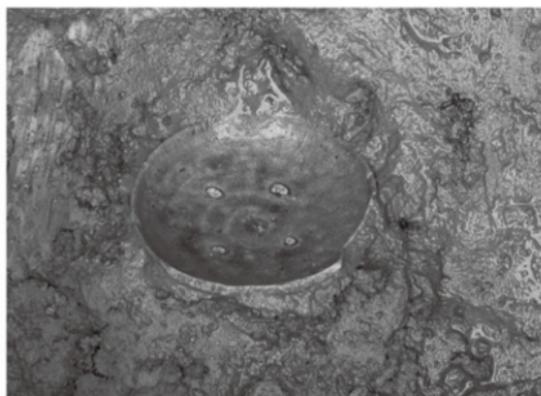
2区 SK02 完掘状況
(北から)



2区 SD03 検出状況
(北西から)



2区 SD03(南から)



2区 SD03 陶磁器出土状況
(南から)



2区 SD03 付近下層確認
状況(南西から)



3区 1層上面検出時
(南から)



3区 1層上面検出時
(北西から)



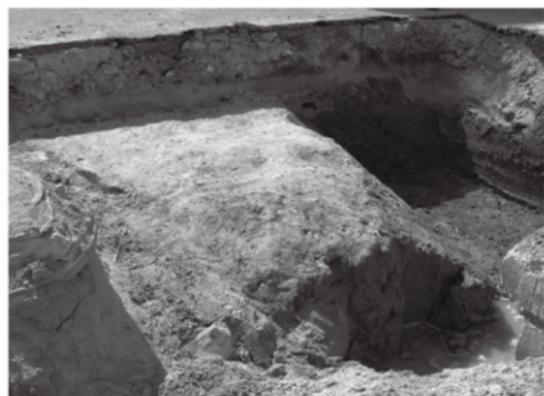
3区 調査風景(南から)



3区 1層上面県庁舎掘り方
埋土除去時(北から)



3区 1層上面県庁舎掘り方
埋土除去時(南から)



3区 1層上面県庁舎掘り方
埋土除去時(東から)



3区 西壁セクション
(東から)



3区 西壁セクション拡大
(東から)



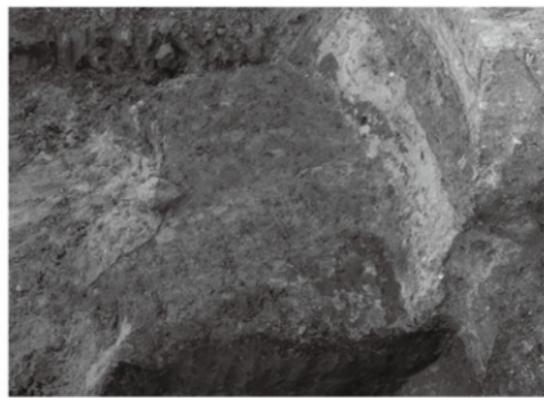
3区 2層上面検出時
(北から)



3区 3層上面検出時
(南から)



3区 3層上面検出時
瓦出土状況



3区 4層上面検出時
(北から)



3区 大溝 (SD01)(北から)



3区 大溝 (SD01)(西から)



3区 大溝セクション
(東から)



3区 大溝 (SD01) 完掘時
(南から)



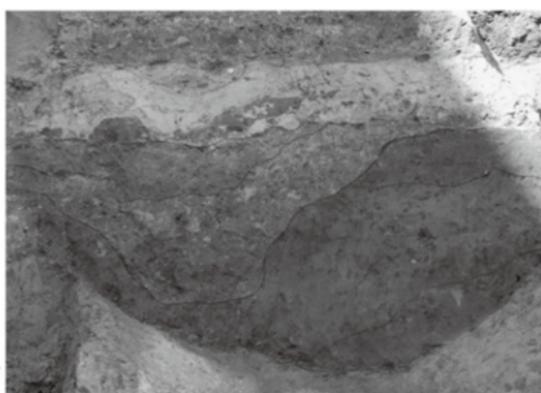
3区 大溝 (SD01) 完掘時
(北から)



3区 最終掘下げ面
(東から)



3区 最終掘下げ時セクション
(東から)



3区 最終掘下げ時セクション
拡大(東から)



3区 最終面(北東から)



4区 分庁舎北調査区
セクション(北から)



4区 分庁舎北調査区
セクション(東から)



4区 分庁舎北調査区
工事立会時(東から)



松江城下町遺跡
表土掘削前状況（北から）



松江城下町遺跡
第1面完掘状況（東から）



松江城下町遺跡
第1面ピット群（南から）



松江城下町遺跡
調査区西壁セクション



松江城下町遺跡
第2面検出状況(南から)



松江城下町遺跡
第2面検出状況拡大
(南から)



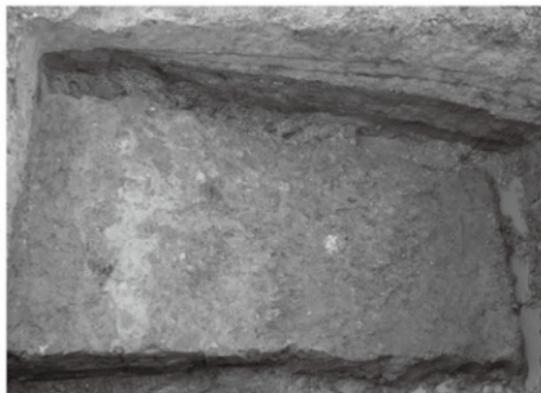
松江城下町遺跡
第2面検出状況拡大(東から)



松江城下町遺跡
調査指導風景



松江城下町遺跡
第3面検出状況(南から)



松江城下町遺跡
第3面検出状況拡大
(南から)



松江城下町遺跡
調査区から松江城方面を望む
(東から)



松江城下町遺跡
SD01-A セクション
南から)



松江城下町遺跡
SD01-A セクション
拡大(南から)



松江城下町遺跡
SD01-A 完掘状況(西から)



松江城下町遺跡
SD01-A 完掘状況(北から)



松江城下町遺跡
SD01 肩付近杭列
断割り状況(東から)



松江城下町遺跡
SD01 肩付近杭列
断割り状況拡大(東から)

松江城下町遺跡
第4面検出状況(南から)



松江城下町遺跡
第4面検出状況
西側(東から)

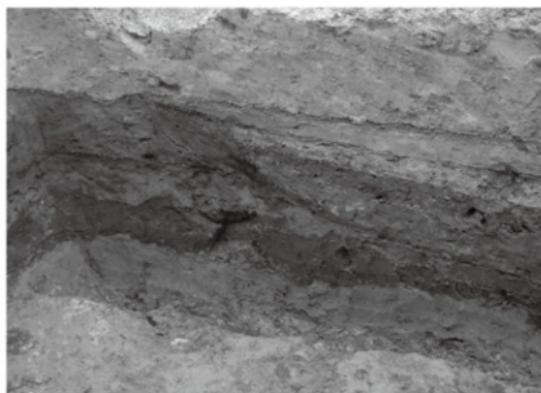


松江城下町遺跡
第4面検出時
西壁セクション(東から)





松江城下町遺跡
SD01-B 完掘状況(南から)



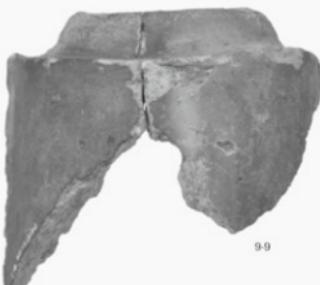
松江城下町遺跡
SD01-B 完掘状況拡大
(南から)



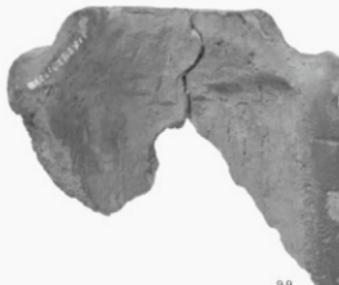
松江城下町遺跡
SD01-B 底部付近セクション
(南から)



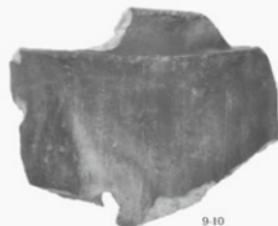
1区 出土遺物



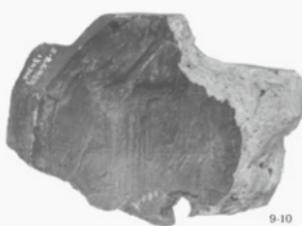
9-9



9-9



9-10



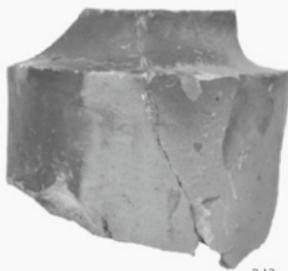
9-10



9-11



9-11

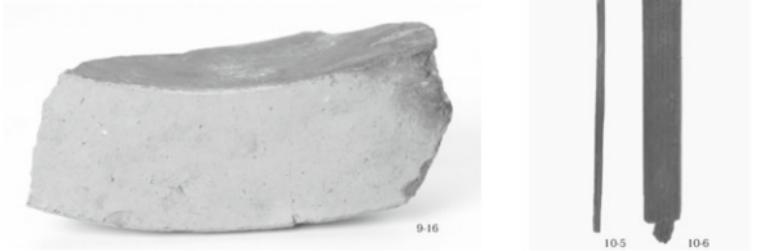
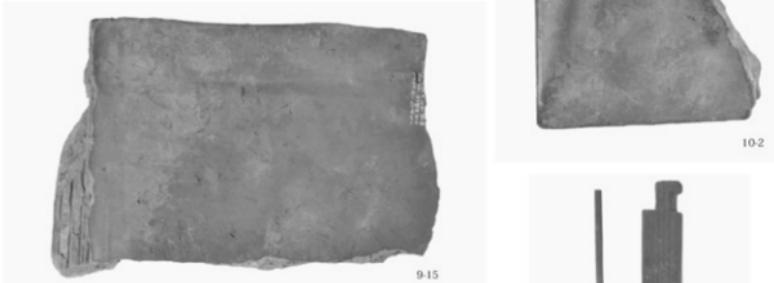
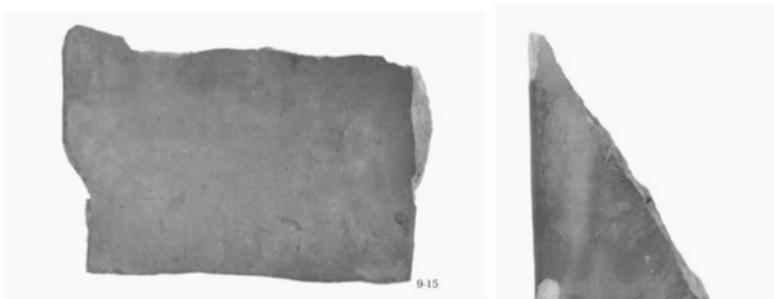
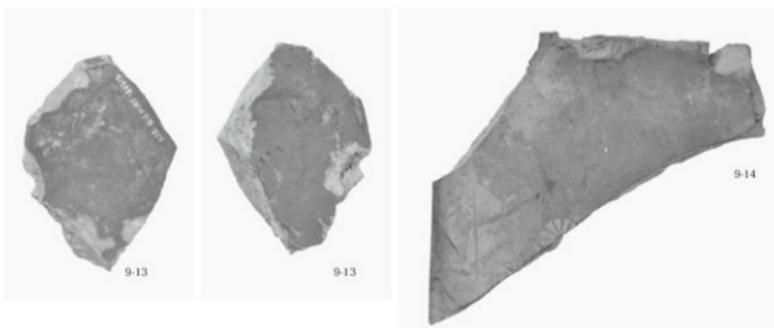


9-12

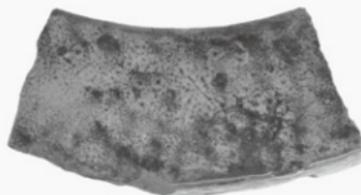
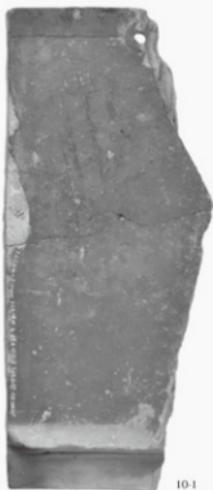


9-12

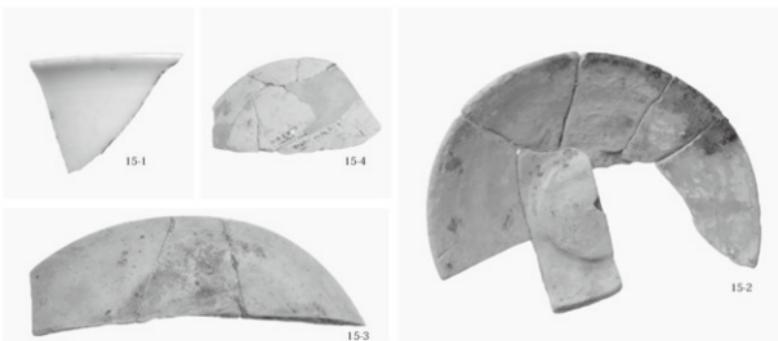
1 区 出土遗物



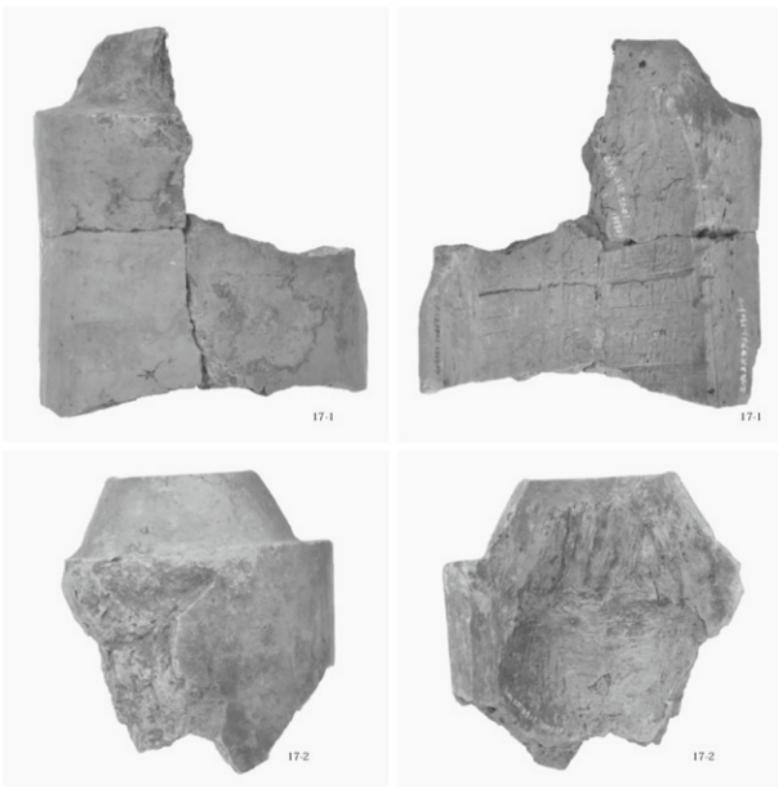
1区 出土遺物



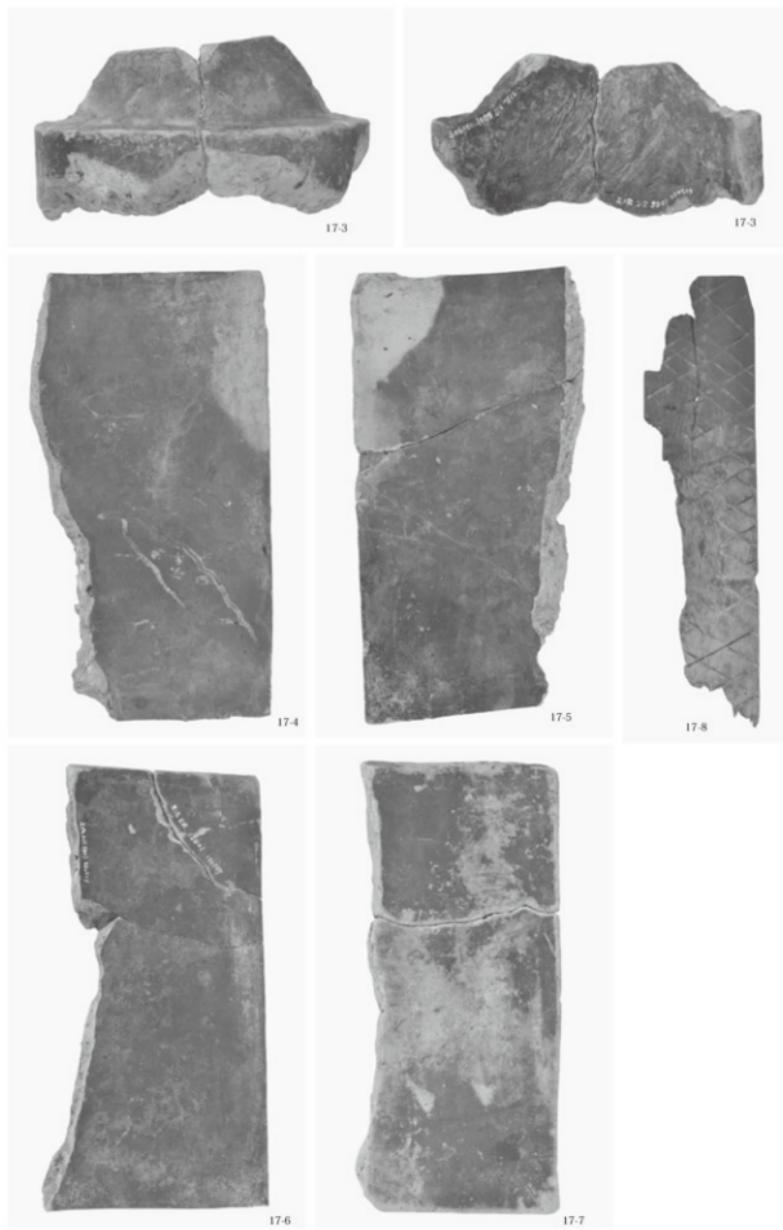
1 区 出土遗物



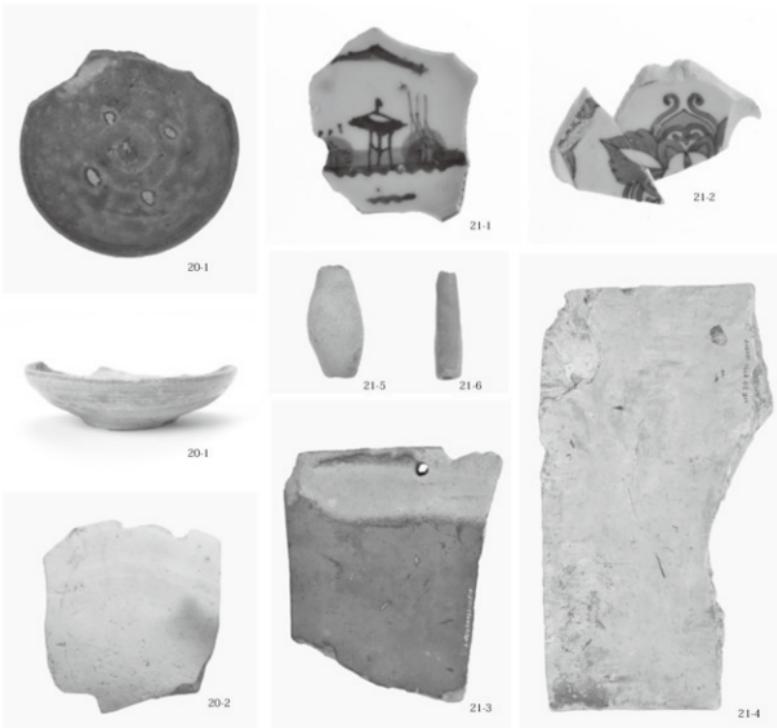
2 区 SB01 付近出土遺物



2 区 SD01 出土遺物

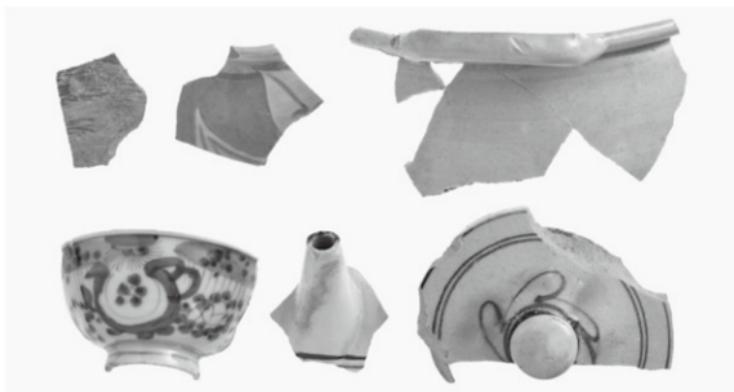


2 区 S D O 1 出土遗物



2区 SD03他出土遺物

2区 遺構に伴わない遺物



2区 遺構に伴わない遺物



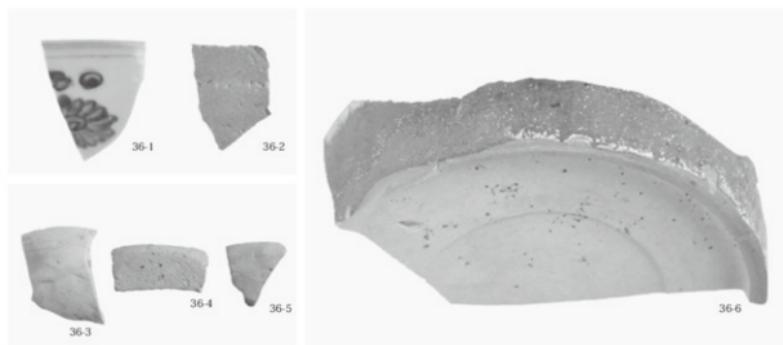
28 図

3 区 出土遺物



a

4 区 出土遺物



松江城下町遺跡(殿町 128) 出土遺物

報告書抄録

松江城三之丸遺跡
松江城下町遺跡(殿町128)

—島根県庁改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 2015(平成27)年3月
発行者 島根県教育委員会
編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 島根県松江市打出町33番地
電話 0852-36-8608
印刷 さんきゅう印刷株式会社

